

学内広報

for communication across the UT



特集：

「知の還元」の実現に向けて

—研究成果の社会還元を促す「大学発ベンチャー」の作り方—



2006.12.13

No. 1349

東京大学は創設以来、産業界との連携を通じ、社会の発展に大きく寄与してきました。昨今、知的財産権をめぐる国際競争の激化や新規産業創出への社会が寄せる期待の高まり、更には、研究成果の社会への還元手段の変化等、東京大学をめぐる環境は大きく変わりつつあります。



■「知の還元」の目に見えるカタチ

東京大学は、産学連携の推進を知的創造活動の重要な柱の1つと位置づけ、2004年4月、総長の下に産学連携本部を設置しました。

産学連携本部は知的財産の「創造」「保護」「活用」の“知的創造サイクル”をつくりあげるため、「産学連携研究推進部」「知的財産部」「事業化推進部」の3部を設置し、東京大学TL0、東京大学エッジキャピタルとの密接な連携を構築して、全学的な基盤整備を進めています。

そして、知的財産は、ただ存在するだけではなく、何らかの目に見えるカタチで社会に還元されてはじめて新しい価値を創造していきます。その1つのカタチである事業化には、2つの方法があります。

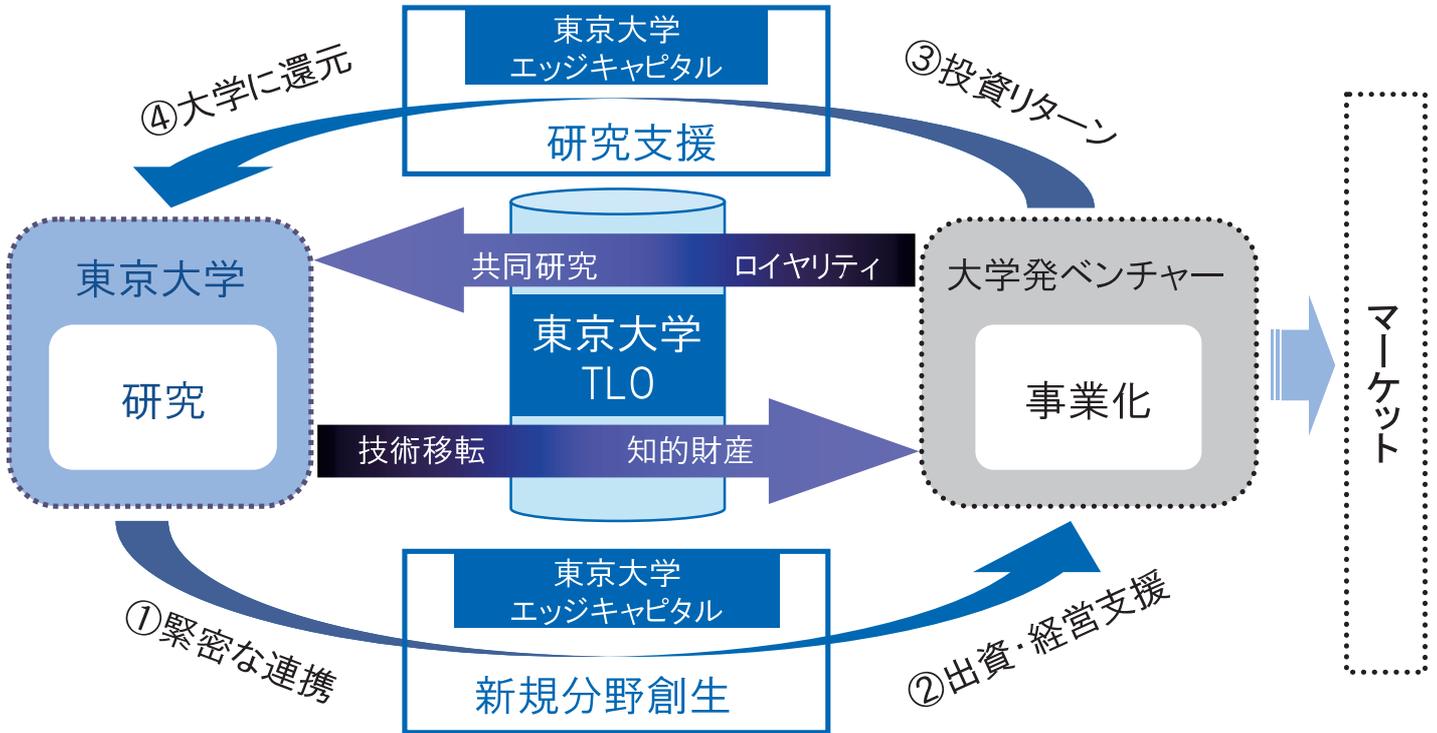
1. 東京大学TL0を通じて、既存の企業に大学の知財を技術移転し、その企業が実際の商品・サービスにその知財を活かしていく方法
2. 東京大学エッジキャピタルを通じて、大学の知財を活かすべく大学発ベンチャーを立ち上げ、1つの事業体としての成長を目指す方法

研究者の起業による事業化のケース



※東京大学エッジキャピタル（UTEC）が、事業化の可能性を検討するステップ2の段階からご相談に応じます

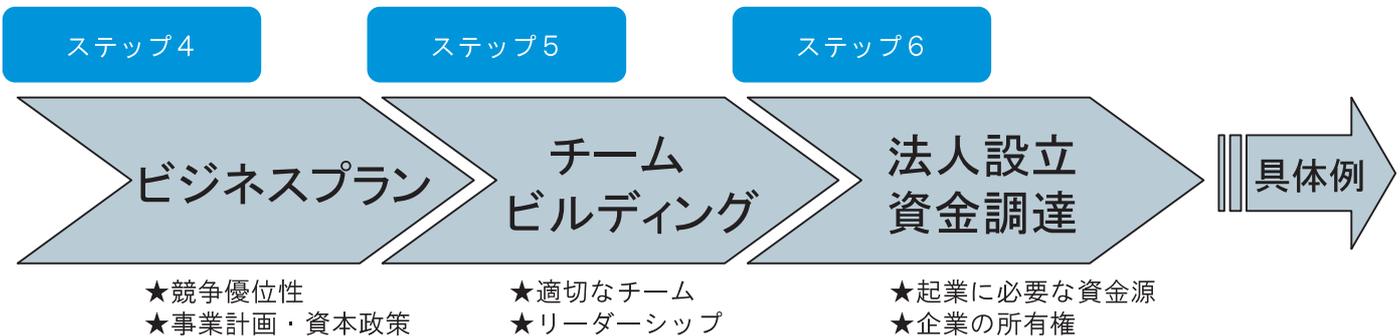
ベンチャーを利用した研究成果の社会還元モデル



1. 東京大学の持つ優れた研究成果・人材を目に見えるカタチ(大学発ベンチャー)で社会に還元
2. 東京大学エッジキャピタルの投資リターンを大学に還元することで、大学の研究開発・人材育成の更なる活性化を図る

【東京大学TLO(CASTI)】
 東京大学の知的財産全般に関するエイジェントです。大学帰属となった知的財産の権利化（特許）、産業界へのマーケティング・ライセンス活動を行っています。国内外を問わず様々な企業を対象にライセンス活動をしており、大学の技術を核に起業したベンチャー企業も多く含まれています。
 URL <http://www.casti.co.jp/>

【東京大学エッジキャピタル(UTEC)】
 東京大学発の知的財産を活用したベンチャー企業や、東京大在籍又は出身の優れた人材が率いるベンチャー企業に対して投資を行う、東京大学に認定された唯一のベンチャーキャピタルです。UTECは東京大学の研究者・学生・卒業生のパートナーとして、早い段階からの起業・事業化に関する相談に応じています。
 URL <http://www.ut-ec.co.jp/>



“Company”により「知の還元」

大学の研究成果を用いて研究者自らが起業したケースとして、2005年3月に設立されたアドバンスト・ソフトマテリアルズ株式会社（以下ASMI）があります。

そこで、同社の取締役である伊藤耕三教授（本学新領域創成科学研究科）に、大学発ベンチャーを起こした経緯と実際についてうかがいました。

Q. 何が決め手となって起業されたのですか？

A. 私はそもそも地味な基礎研究に没頭するタイプで応用研究とは無縁でした。ところが、私どもが全く新しいコンセプトから発明した高分子ゲル『スライドラングゲル』は、汎用性が高く、応用範囲が非常に広がったのです。この発明を世の中で最大限有効に利用してもらいたいと強く思うようになりました。当初は既存企業との共同研究も考えましたが、特定企業との共同研究では将来の利用分野が限定されてしまうことが難点でした。様々な方法を模索していた折、東京大学が「知の還元」に向けて大学発ベンチャーを支援する仕組みがあることを聞き、起業することを決意しました。

Q. 起業の決断から最も苦労された点は何ですか？

A. やはりお金です。大学の本来の使命である基礎研究とは異なり、事業化に近い応用開発に使える予算は大学にはありませんでした。幸い、文部科学省のプレベンチャー補助事業に採択されたため、資金を確保でき、応用開発に特化したポスドクや技術者を5名程採用することができました。最初は本当に事業化できるか非常に不安でしたが、次第に確信が出てきました。そして、会社設立に向けたビジネスプランを東京大学エッジキャピタル（UTEK）と一緒に作って行きました。事業計画や資本政策の策定という段階から支援を受けたため、経営陣の決定、会社設立、その後の出資と比較的スムーズに行きました。

Q. 人材確保には苦労されなかったのでしょうか？

A. 人材確保については相当苦労しました。ASMIの場合、実際に会社経営を行う経営陣だけでなく、応用開発を行う研究員の確保もしなければなりません。UTEKや東京大学TLOの助言の下で、経営陣から研究員に至るまで全ての採用に関わってきました。研究員のキーパーソンは、ポスドクの方でした。彼らと話し合っていくうちに、事業に参加してくれた彼等の決断を無駄にはしないと奮起し、力を合わせてやり抜こうと決意を固めました。

そして、経営陣の採用は本当に苦労しました。経営は一人で行えるものではなく、陣頭指揮を取る経営者、マーケティング担当者、管理担当者等で構成されるチームでなくては機能しません。実は、最初の社長候補の方の下ではチームがうまく機能しませんでした。世界観や人生観の異なるメンバーの間で意見の食い違いもありました。この難局を乗り切ったのは、ASMIの梶原社長のおかげです。前職でのベンチャー経営経験を活かした梶原社長のリーダーシップの下、長い時間をかけて議論を重ね、成功するための意識の統合を図りました。今でも経営環境が変わる毎に、合宿等を行って徹底的にディスカッションし、意識あわせを行っています。私は“Company”という言葉が大好きです。Companyという英単語は会社とも訳されますが、『人々が一緒になること』とも訳されます。つまり、多様な人がそれぞれのスキルを持ち寄って、一緒になって、初めてCompanyが誕生するんですね。志を同じくした社員が力を合わせ、共通の夢に向かって成功を目指す。それこそがCompanyそのものなのだと思います。実際、様々な人が力を合わせなければとてもここまで実現できなかったと思います。



伊藤耕三教授
（新領域創成科学研究科）

プロフィール

1981年東京大学工学部卒業、1986年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了（工学博士）、同年通商産業省工業技術院繊維高分子材料研究所研究員、1990年同主任研究官、1991年東京大学講師、1994年同助教授、2003年同教授（現職）新領域創成科学研究科。

2005年アドバンスト・ソフトマテリアルズ株式会社取締役就任。

Q. 途中で商品化の優先順位は変わりましたか？

A. プレベンチャー補助事業の3年間の間に、約20社と話をしましたが、ベンチャーの設立後に優先順位は大きく変わっていきました。例えば、当初はバイオマテリアル分野に主眼を置いていましたが、実際に最初に商品化が決まったのは衣服分野でした。研究開発とビジネスの時間軸は大きく異なります。短期の収益性も重要で、優先順位付けは経営陣の判断に全幅の信頼をおき、委ねてあります。

Q. 今後の目標はいかがですか？

A. ASMIの直近の目標は、株式公開（IPO）を果たすことです。IPOできれば、UTEK等を通じて大学に投資リターンが還元され、それが大学の基礎研究をサポートすることに活用されます。そして、ASMIに続く新たな大学発ベンチャーが大学から次々と創出される。そんなコミュニティが形成されることが私の夢なんです。もちろん、ASMI自身もIPOを1つの通過点としてさらなる発展を遂げ、社会に貢献できる企業として成長し続けたいと思っています。

Q. 最後に一言をお願いします。

A. 大学の発明は基礎研究から生まれてきますが、大学には、その発明を育て、社会に還元していく崇高な使命があると思います。そして、基礎研究のアカデミアの世界とCompanyの両方の醍醐味を味わうべく、東京大学の若い研究者の方々にはUTEKやTLOを活用しながら、大学発ベンチャーにどんどん挑戦していただきたいと思っています。

問い合わせ先：

産学連携本部（研究協力部 産学連携課）

内線:21489 <http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/faq/internals.html>

NEWS

一般ニュース

学生部

平成18年度（後期）東京大学学術研究活動等奨励事業（国外）の採択決まる

本学大学院学生の国外における研究活動の活性化を図るため、平成16年度後期より実施された「東京大学学術研究活動等奨励事業（国外）」に関して、10月30日の東京大学学生生活委員会奨学部会において、平成18年度後期（平成18年12月～平成19年5月出発）応募者の審査が行われ、54件の実施計画が採択された。応募者は101名であった。なお、研究科別の応募及び採択状況は以下のとおりである。

研究科名	応募者数	採用者数	主な渡航先
人文社会系研究科	16	6	ロンドン、サラソタ、パリ、城南、メンフィス
教育学研究科	4	3	北京、ケルン、ウランバートル
経済学研究科	1	1	広州
総合文化研究科	22	7	シカゴ、フロリアノポリス、台北、キーストン、北京、パリ、ロスアンゼルス
理学系研究科	13	6	ポツダム、サンディエゴ、シカゴ、ニューヨーク、バンコク、ニューストン
工学系研究科	7	7	エジンバラ、ペンシルベニア、デトロイト、ハイデルベルク、サンフランシスコ、ソウル、オハイオ

農学生命科学研究科	10	5	ロマワイ、アリゾナ、セレンゲディ、ブントカナ、天津
医学系研究科	9	6	キガリ、サンフランシスコ、台北、ピエンチャン、オランダ、ナワルパラシ
薬学系研究科	1	1	フィラデルフィア
数理科学研究科	1	1	ナッシュビル
新領域創成科学研究科	12	6	ハワイ、フィラデルフィア、アンタルヤ、マカッスル、サンタフェ、ローマ
情報理工学系研究科	2	2	ニューオリンズ
学際情報学府	2	2	ボストン、ワシントンDC
公共政策学教育部	1	1	デリー
合計	101	54	

バリアフリー支援室

経済学部学生が施設部保全課環境整備チームの清掃実習に参加

11月1日（水）と11月15日（水）の2回に分かれ、経済学部の学生合計85名が施設部保全課環境整備チームの実習という形で、本郷キャンパスの清掃やゴミの分別を行った。本実習は経済学部講義「障害学」（担当：長瀬修特任助教授）の一環として実施された。環境整備チームは今年の4月に発足し、知的障害のあるスタッフ10名がコーディネーターと共に本郷キャンパスの清掃を担っている。



参加した学生は、大量の落ち葉を集める苦労や、さまざまなゴミの分別作業の大変さを実感した。コメントの

一部を以下、紹介する。

「たった3時間足らずの実習でしたが、汗もけっこうかいて、もしこれが真夏や真冬の作業なら、その大変さはとんでもないと思えました」

「スタッフの方が本当にプロフェッショナルなんだなということ強く感じた」

「世間の一部の注目は別としても、意外に学生にはこのような活動〔東大の知的障害者雇用〕は知られていないのではないかという事です」

「学校で環境整備チームの方々に会ったら、きちんと挨拶をして、声をかけようと思うのです」

「ゴミの分別作業に携わらせてもらいましたが、分別することがこれほど困難なことだとは思っていなかったので、分別の大切さを改めて認識しました」



学生部

“キャリアキックオフセミナー”開催される

キャリアサポート室では11月5日（日）、6日（月）の両日、本郷キャンパス内御殿下ジムナジウムにおいて、キャリアキックオフセミナーを開催した。これは学生団体である経済学部学生経友会との初の共催になる企画で、有名企業や官庁に勤める卒業生を招き、それぞれの業界や業務についての説明を受けながら、働くということについて考える場を学生に提供することを目指すもので、みずからのキャリア形成なり、就職活動なりについて、学生ひとりひとりにとってのきっかけになることを期待して、『キックオフ』セミナーと名づけられた。

「働くを“知る”“考える”をメインテーマに、各ブースでは企業・官庁に勤めるOB・OGによる説明や質疑応答が、それと同時進行のOB・OGコーナーでは互いに業界を異にする卒業生数名を学生が困むかたちでの懇談が繰り広げられた。

両日で延べ70社が参加、1,600人を超える学生が来場、特に平日開催となった2日目の6日は、来場者が予想をはるかに上回る1,000人近くにまでのぼり、あらためて学生の意識の高さが窺われる盛況であった。



ブースにて



地球観測データ統融合連携研究機構

EDITORIA始動 —国家基幹技術「データ統合・解析システム」キックオフ会議開催される—

東京大学地球観測データ統融合連携研究機構（EDITORIA）は、工学系研究科 小池俊雄教授を機構長とし、総長室総括委員会の下に、今年4月に発足しました。連携研究機構としては本学において、小宮山総長率いるサステナビリティ学連携研究機構に次ぐ二番目の連携組織となります。この組織の主要プロジェクトである、国家基幹技術「データ統合・解析システム」が、文部科学省からの委託研究費として採択され、EDITORIAがその中核として全面的に支援をすることとなりました。



小池俊雄 地球観測データ統融合連携研究機構 機構長

国家基幹技術「データ統合・解析システム」は、本学の6部局（生産技術研究所、気候システム研究センター、空間情報研究センター、海洋研究所、農学生命科学研究科、および工学系研究科）をはじめ、学外の連携組織として、（独）海洋研究開発機構（JAMSTEC）および、（独）宇宙航空研究開発機構（JAXA）、慶応大学、京都大学、（独）農業環境技術研究所、（独）農業・食品産業技術総合研究機構が参画している非常に大規模なプロジェクトです。

本プロジェクトでは、地球規模観測や各地域における観測で得られたデータを収集、永続的な蓄積・統合・解析をし、さらには社会経済情報などとの融合を行い、世界の環境問題や自然災害などの脅威に対する危機管理に有益な情報へと変換して、国内外に提供することにより、わが国の総合的な安全保障や国民の安全・安心の実現に資することを目的としています。また、当該科学技術分野におけるわが国の国際的主導性を発揮して、包括的で調整された持続的な地球システムの観測を達成することを目的とする『複数のシステムからなる全球地球観測システム（GEOSS）』の構築を先導するものです。

11月14日（火）本学医学部総合中央館大会議室において、「データ統合・解析システム」のキックオフ会議が、EDITORIA主催で行われました。

会議の冒頭では、文部科学省研究開発局海洋地球課地球・環境科学技術推進室長 坂本修一氏から本プロジェクトに対する政策的位置づけの説明があり、社会的期待は非常に大きいものがあるとして、激励のご挨拶をいただきました。

その後、第一部として、「地球観測データの科学的・社会的に有用な情報への変換」に係わる12研究課題、第二部として、「開発・実証するシステムの機能、および対象とするデータ」に係る3研究課題の研究計画と進捗が紹介されました。また、第三部の「総合討論」では小池機構長より、温暖化・気候変動、水循環、生態系の3分野間の連携に加えシステム側との連携が不可欠であり、データ統融合の成功事例を早く生み出すことが重要であることが強調されました。



キックオフ会議での風景

今年10月に業務を開始したばかりの新しいプロジェクトですが、すでに今年度中の成果創出を目指して、各分野の研究者が相互に鋭意努力していることが確認され、本キックオフ会議は、プロジェクトの成功に向け大きな第一歩となりました。

なお、本会議の状況は、EDITORIAのHPに掲載予定です。次のURLをご参照ください。

<http://www.editoria.u-tokyo.ac.jp>

(12/15より正式オープンいたしますが、随時コンテンツ更新中です。)

学生部
第53回総長杯争奪水上運動会
開催される

恒例の運動会行事「総長杯争奪水上運動会」が、11月18日(土)に埼玉県戸田市の戸田オリンピックボートコースで開催されました。本大会は、本学関係者によるボートレース大会で、競技経験に関わりなく誰でも楽しめるスポーツイベントとして、またボートレースを体験する数少ない機会として好評を博しています。今年度も学生・教職員ら総勢157名が参加し、天候にも恵まれ大いに盛り上がりました。

レースは「ナックルフォア」と呼ばれる4人漕ぎの艇を用い、250mレース2回の合計タイムを競います。艇に乗る「クルー」は、参加者が4人チームで漕ぎ手となり、各チームに漕艇部員がコックス(舵取り)として加わって大会を通じて丁寧に指導します。競技ボートは公園ボートと違って脚を主体に体全体を使って漕ぐもので、多くの参加者にとっては経験のない動きですが、すぐに上達してどこも迫力あるレース展開を見せました。



レガッタレース風景

メインレースのレガッタの部のほか、陸上でもエルゴメーターというボートのトレーニングマシンを用いたチームリレー等が行われ、会場には始終歓声が続きました。昼食時に振舞われた野菜スープも好評で、レース後には会場の東京大学戸田橋艇庫にて懇親会が開かれました。

第53回大会のレガッタの部は、昨年度2位の「チーム宮下」が悲願の優勝を遂げました。また、今回は留学生2チームがそれぞれレガッタの部2位とエルゴの部団体優勝と、大活躍をみせました。

大会全体の結果は以下の通りです。



エルゴメーター記録会

大会結果

【レガッタの部】 <東京大学総長杯>

順位	チーム名	合計タイム	修正	修正後 タイム
優勝	チーム宮下	2分36秒91	+12秒	2分48秒91
2	Das Boot	2分51秒18	+6秒	2分57秒55
3	大澤組	3分01秒52	なし	3分01秒52
4	チーム大倉	3分04秒71	なし	3分04秒71
5	マテ工BC	3分07秒09	なし	3分07秒09
6	グローと愉快 な仲間たち	3分15秒54	-6秒	3分09秒54
7	全力	2分58秒27	+12秒	3分10秒27
8	エースダキオン テッシュコー	3分10秒62	±0秒	3分10秒62

※250mのタイムトライアル2回の合計
 ※順位決定の際、経験者は一人につき+6秒、
 女性は一人につき-3秒で計算されます

【エルゴの部（団体）】

順位	チーム名	タイム
優勝	The Dragonflies	2分31秒60
2	チーム宮下	2分46秒60
3	学生部本部チーム	2分47秒60

※4人チームで男子200m、女子150mのチームリレー

【エルゴの部（個人）】

順位	名前（チーム名）	距離
優勝	大田隼一郎（チーム腹切り）	164m
2	高橋晋也（一誠ユース）	160m
3	鈴木拓野（全力）	158m

※各チームから代表者1名が、30秒間の進行距離を競います

一般

施設部

世田谷区障害者雇用促進協議会から
東京大学へ感謝状が贈呈される

本学は障害者雇用を積極的に推進している。その中でも知的障害者の雇用に関しては、昨年来、世田谷区立知的障害者就労支援センターすきっぷの協力を得て取り組んでおり、現在、経済学研究科が2名、施設部保全課環境整備チームが5名、それぞれ世田谷区民である知的障害者を雇用している。

そうした実績が評価され、本学へ世田谷区障害者雇用促進協議会及び世田谷区から表彰状が、11月21日（火）16時半から世田谷区文化情報センター4階にて授与された。

世田谷区障害者雇用促進協議会は、地域の商工団体、養護学校、ハローワーク、就労支援施設等、障害者の一般就労に係わる関係機関、団体等が構成し、地域における障害者雇用の促進に取り組んでいる。

今回表彰された事業所は、授産活動については20事業所、雇用支援については13事業所であった。本学を代表して、清水政美施設部保全課長が授与を受けた。これを励みに、さらなる障害者雇用推進に向けて望んでゆきたい。



感謝状を受けとる清水施設部保全課長

人事部
東京大学教職員永年勤続者表彰式
 行われる

平成18年度の東京大学教職員永年勤続者表彰式が、11月22日（水）午前10時から、本部棟12階大会議室において、小宮山総長、濱田理事、上杉理事、関係部局長及び関係事務（部）長等の列席のもと行われた。

表彰式では、被表彰者75名を代表して、医学部附属病院 落合眞紀子さんに表彰状の授与並びに記念品が贈呈された。総長から挨拶の後、被表彰者を代表して、医科学研究所総務課長 糸井和昭さんより謝辞が述べられた。



小宮山総長から表彰状と記念品を受ける落合眞紀子さん



小宮山総長に謝辞を述べる糸井和昭さん

なお、本年度表彰された方々は次のとおりである。

- | | |
|------------------|---------|
| 総務部 | 藤内 淳 一 |
| | 松下 彰 良 |
| 人事部 | 出澤 忠 忠 |
| 財務部 | 熊澤 鉄 也 |
| | 須藤 桂太郎 |
| | 水野 伸 伸 |
| 施設部 | 稲葉 昭 英 |
| | 加藤 耕 士 |
| 学生部 | 齋藤 尚 巳 |
| | 佐々木 博 博 |
| | 西澤 章 公 |
| | 橋爪 巖 巖 |
| 研究協力部 | 小杉 真 人 |
| 附属図書館 | 柄谷 泰 文 |
| 情報基盤センター | 井爪 健 雄 |
| 大学院医学系研究科・医学部 | 堀越 文 夫 |
| 医学部附属病院 | 石垣 真理子 |
| | 石原 正 子 |
| | 大森 きよみ |
| | 落合 眞紀子 |
| | 金子 伸 行 |
| | 工藤 由美子 |
| | 佐藤 孝 夫 |
| | 繁田 則 子 |
| | 下坂 浩 則 |
| | 鈴木 浩 之 |
| | 泉田 栄 子 |
| | 高崎 雅 子 |
| | 本山 けさみ |
| | 和田 敏 雄 |
| 大学院工学系研究科・工学部 | 岩田 悌 次 |
| | 内田 利 之 |
| | 木村 美津子 |
| | 竹元 龍 太 |
| | 樽谷 茂 徳 |
| | 府川 和 弘 |
| 大学院人文社会系研究科・文学部 | 山口 智 一 |
| 大学院理学系研究科・理学部 | 和田 洋 隆 |
| | 石川 文 明 |
| | 大山 吉 司 |
| | 仲部 齋 人 |
| 大学院農学生命科学研究科・農学部 | 吉田 英 治 |
| | 五十嵐 勇 猛 |
| | 入江 久 臣 |
| | 笠原 俊 浩 |
| | 齋藤 祐 紀 |
| | 鈴木 勝 則 |
| | 田山 勝 司 |
| | 福士 憲 司 |

大学院経済学研究科・経済学部

大学院総合文化研究科・教養学部

大学院教育学研究科・教育学部

大学院情報学環・学際情報学府

医科学研究所

地震研究所

生産技術研究所

分子細胞生物学研究所

海洋研究所

先端科学技術研究センター

宇宙線研究所

物性研究所

柏地区事務部

山崎 克巳
 吉井 初巳
 岩下 悟一
 小松 陽一
 坏 陽子
 石川 ゆう子
 篠田 正人
 三浦 圭子
 井上 享子
 福島 昌子
 福田 幸雄
 糸井 和昭
 剣持 保行
 片倉 智
 高野 早苗
 宮澤 紀美
 新井 千恵子
 濱田 すみ子
 菊池 信治
 篠原 昌延
 柄木 良友
 小池 正義
 野澤 清和
 常行 晴美
 山本 哲也
 以上75名

研究協力部
 東京大学生命科学研究ネットワーク・シンポジウム
 —東京大学生命科学の未来を拓く—

11月25日（土）午前9時半から安田講堂及び工学部2号館において、生命科学研究ネットワーク主催による第1回シンポジウム「東京大学生命科学の未来を拓く」が開催され、シンポジウム全体の参加者は、本学の大学院学生を中心に、教職員及び一般の聴講者等、合わせて約1,060名にのぼり、盛況のうちに無事終了しました。

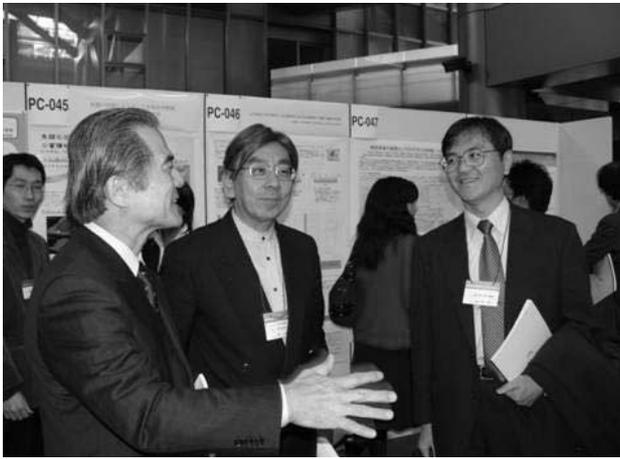


小宮山総長挨拶（安田講堂）

シンポジウムは、安田講堂を使用した講演の部、安田講堂及び工学部2号館を使用したポスターセッションの部から構成されました。

講演の部では、廣川信隆ネットワーク長（医学系研究科長）の開会挨拶を皮切りに、「サーカディアンリズムを司る体内時計への挑戦」と題した理学系研究科・深田吉孝教授からの講演、「完全長cDNAから垣間見る新しいゲノム像」と題した新領域創成科学研究科・菅野純夫教授からの講演、「細胞内シグナル伝達研究から医療へ」と題した医科学研究所・井上純一郎教授からの講演と続き、それぞれ活発な質疑応答があり午前の部を終えました。

およそ3時間のポスターセッションの時間帯を挟み、15時過ぎから、小宮山宏総長の挨拶に続き、「モーター分子群、キネシンスーパーファミリー蛋白、KIFs：細胞内物質輸送から脳の発生及び記憶、学習の制御、そして体の左右非対称性の決定まで」と題した廣川信隆医学系研究科長からの講演、「人工細胞膜ポリマーの創製とバイオ機能」と題した工学系研究科・石原一彦教授からの講演、「マイクロ流体デバイス—新しい生命科学のツールとして—」と題した生産技術研究所・藤井輝夫助教授からの講演が行われ、生命科学の最先端の講演に受講者も熱心に聞き入っていました。講演の最後には門脇孝実行委員長（医学系研究科教授）の開会挨拶で講演の部は終了となりました。



ポスターセッションの部では、博士学生を含む若手研究者を中心に308題にのぼる演題登録があり、安田講堂回廊、同4階ロビー、工学部2号館フォーラム、同展示室の4会場で発表を行ないました。今回のポスターセッションでは、研究科ごとではなく生命科学の研究分野ごとに展示したことで、類似した研究分野を持つ研究者のポスターが集合することになり、部局を越えた交流が可能となりました。それにより、活発な議論が繰り広げられ、本シンポジウムの主な目的の1つである学内における生命科学研究者間のコラボレーションとコミュニケーションが大いに図られた3時間になりました。

また、総長は、ネットワーク長、実行委員長の案内でポスターセッション会場を熱心に回られ、その後の挨拶の際にも「学内行事としては、これだけの規模のポスター発表は目にした事がなく、おそらく初めてのケースと思われ、若手の研究者がポスターを前に熱く議論する姿に感銘を受けた」との挨拶がありました。



最後に、18時過ぎからは、ポスターセッション各会場においてポスター発表者を中心とした懇親会が開催され、学内関係者約300名が参加し、盛況のうちにシンポジウムは終了しました。



環境安全本部

喫煙対策ワーキンググループ (WG) の発足と「喫煙意見箱」の設置

WHOの「たばこ規制枠組み条約」や「健康増進法」第25条においては、受動喫煙防止が規定されています。本学の現状の喫煙対策をみると、一部の部局では規則を作成していますが、多くの部局では規則を作成しておらず、自主的な分煙対策にとどまっているようです。本WGでは、本学として学内の喫煙問題にどのように対応するのかを、将来のあるべき姿を考えた上で検討することとしています。そのためにも専門家のご意見及び学生・教職員の方々からのご意見をいただきWGでの検討に生かしたいと考えています。

「喫煙意見箱」の設置について

喫煙対策WGでは、本郷キャンパス本部棟1階エントランスホールに「喫煙意見箱」を設置しました。喫煙に対する喫煙者・非喫煙者の方々の忌憚のないご意見をぜひお寄せください。また、遠隔地の方は学内便で「環境安全本部 喫煙意見箱」宛にお送りください。封筒の中には意見以外は入れないでください。様式は自由、無記名をお願いします。ただし、電子メールでの投稿はご遠慮ください。お寄せ頂いたご意見は今後WGで議論する上で参考にさせていただきますが、個々のご意見への回答はいたしませんので、ご了承ください。なお、意見箱の設置は1月末迄を予定しています。



喫煙意見箱はこのあたりにあります

学生部
入試事務室の設置

平成19年度入学者選抜実施に関する事務を処理するため、1月1日（月）から3月31日（土）までの間、入試実施委員会のもとに、入試事務室が設置されることとなった。

入試事務室は、学生部副部長兼入試課長を室長に、室長代理、室長補佐及び室員若干名をもって構成される。

室員は、入試課職員のほか、総務部、人事部、財務部、施設部、学生部、研究協力部等から派遣される事務職員で、およそ3ヶ月にわたり、入学試験に関する業務にあたる。

学生部
**平成19年度大学入試センター試験の
本学割当数決まる**

平成19年度大学入試センター試験の東京地区での割当数が、73,641人に決まり、このうち本学が分担する志願者数は10,885人に確定した。

なお、平成19年度は、本郷試験場及び教養学部試験場の他、都立高等学校1校・私立高等学校4校の計5校を借用して実施することになった。

各試験場ごとの割当数及び担当学部は、次のとおりである。

試験場名		志願者数	担当学部
1	東京大学 本郷試験場	法学部	985 法学部
		経済学部	540 経済学部
		工学部	1,160 工学部
		その他	8 薬学部
		小計	2,693
2	東京大学教養学部試験場	3,150	教養学部
3	都立白鷗高等学校試験場	720	教育学部
4	私立富士見丘高等学校試験場	1,121	医学部
5	私立海城高等学校試験場	1,126	文学部
6	私立東京女学館高等学校試験場	1,040	理学部
7	私立開成高等学校試験場	1,035	農学部
合計		10,885	

部局
ニュース

大学院薬学系研究科・薬学部
留学生見学旅行
「上州・軽井沢 だるまの旅」

今年度の留学生見学旅行は「上州・軽井沢 だるまの旅」と銘うって、10月26日（木）・27日（金）の両日、6カ国19名の院生、研究生、研究員、教職員が参加して実施された。

26日（木）は最初に高崎のキリンビール（株）医薬カンパニー医薬探索研究所を訪れた。医薬カンパニーの概要ビデオを見、そのあと研究に関する興味深い講義を受けた。一日違いで特許競争に勝ったことなど、実際の研究生活の厳しさを垣間見ることができた。次いで立食形式で研究員の方々と懇親会を持った。食べながら研究のこと、私生活のことなど話題は尽きなかったようだ。懇親会のあとは二つの班に分かれ、研究所内を見学した。

次に向かったのは「高崎だるま絵付け体験」の大門屋。高崎だるまの特徴は、眉は鶴、髭は亀を意匠しているとのこと。その眉と髭を自分で描く。描いただるまは各自のお土産となった。参加者全員が寄せ書きをした白いだるまは、事故入院で参加できなかった国際交流室の菊池先生へのお土産である。



だるまの絵付け。筆が粗悪品で・・・



お土産のだるまを持って

泊まりは草津温泉ホテルヴィレッジ。温泉とバイキングの夕食を楽しんだあとは、職員の部屋で二次会。日本の文化、「鬼」や「富士山」の話で盛り上がっていたが、22時にはお開き。二次会がこんなに早くお開きになったのは・・・。

27日（金）は朝6時半に玄関集合、「熱の湯」の湯もみショー見学のためである。草津独特の時間湯の説明や湯もみ唄など実演を楽しみ、そのあとは湯畑付近を散策してホテルに戻った。

バイキングの朝食後、9時過ぎにホテルを出発。西の河原公園を散策する。草津温泉を世界で紹介したのは東京医学校のお雇い外国人ベルツ博士である。医学図書館の北東側にベルツ・スクリバ博士の銅像があるが、戦争中供出されることになり、セメント像を作成した。そこで戦争が終わり、そのセメント像は草津町の要請で西の河原公園に設置された。現在セメント像はベルツ記念館にあり、それを基に作成した石像が公園にある。博士が本学に在職していた頃、薬学部は医学校製薬学科であり、縁がないわけではない。そこでその前で記念撮影。

日本のポンペイ、婦恋の鎌原遺跡で自然の驚異を学び、鬼押し出しの溶岩と浅間山を車窓で愛でながら軽井沢へ。旧軽銀座を散策し、買い物を楽しんだ。

遅い昼食は「峠の釜飯」。そして最後は「碓氷峠鉄道文化むら」。めずらしい車輜や、アプト式、機関車の運転体験、ミニSL乗車など楽しいひと時を過ごした。

薬学部には18時無事帰着。日頃研究室に閉じこもり、他の教室の人となかなか話す機会が少ない毎日だが、教室も国籍も身分も越えた有意義な二日間だった。



ベルツ・スクリバ博士の前で

大学院法学政治学研究所・法学部
 平成19（2007）年度
 大学院法学政治学研究所修士課程
 入学試験について

平成19（2007）年度大学院法学政治学研究所修士課程（A選抜・C選抜）の入学試験は、8月30日（水）～8月31日（木）に筆記試験が、10月2日（月）～10月4日（水）に口述試験がそれぞれ行われ、10月27日（金）に合格者（入学許可内定者）が発表された。

なお、志願者数、受験者数及び合格者数は以下のとおりである。

選抜の種類		A	C	計
志願者数	本学出身者	19	2	21
	他大学出身者	61	34	95
	計	80	36	116
受験者数	本学出身者	15	2	17
	他大学出身者	48	29	77
	計	63	31	94
合格者数	本学出身者	6	1	7
	他大学出身者	2	14	16
	計	8	15	23

- A：筆記試験（外国語1科目、専門科目2科目）、口述試験、学業成績により選抜。
- B：司法試験合格者を対象とする。筆記試験（外国語1科目）、口述試験、小論文、学業成績により選抜。
合格発表は12月25日（月）
- C：外国人特別選抜。筆記試験（外国語1科目、専門科目1科目）、口述試験、学業成績等により選抜。

今年度予定していた学内の牧場での学生実習は、10月下旬にはほぼ終了した。これから来春までは、岩間地区（現在は、笠間市）特有の本格的な冬を迎えることになるが、最近当牧場で行ったホットな行事について、一部紹介する。

牧場では、文部科学省が公募している「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」のなかで申請した「畜産物の安全安心を保障する人材の育成教育―首都近郊集約型畜産の振興地区茨城中央部における実践教育―」というテーマが、今年度から3年に亘り採択された。



そのテーマの一環で、10月28日（土）に牧場公開デーを行ない、写生大会や動物ふれあい広場、市民公開セミナー、朝搾りたてのミルクの試飲など多くのイベントを企画した。当日は、岩間地区周辺では茨城県農業総合センターの収穫祭やJA企画のイベントなどが多数開催されたにもかかわらず、澄み渡った秋晴れのもと多くの方が訪れ、牧場ならではの雰囲気に満悦した様子で、次回に向けた開催の手応えを感じとった次第である。



ふれあい広場



写生大会小学生の部で金賞受賞

11月17日（金）は、茨城県内にある養護学校高等部の教員12名と生徒11名が、『校外で学習先の職員や友人・教師と関わることによる社会性の向上、乗馬体験などの動物とのふれあいを通して心身の解放を図る』ことを目的に校外学習に来られた。

まず、講義室で眞鍋教授の概要説明と生徒代表の挨拶でスタートを切り、乗馬と牧場内見学及びヤギの世話で午前と午後の2班に分かれた。学校も生徒自身も、初の試みであり、乗馬をする人、順番を待つ人とも満遍なく笑みがこぼれ、また、ヤギ舎においても同様な光景が見られた。



乗馬体験

11月21日（火）及び22日（水）は、笠間市立岩間中学校第2学年に在籍する生徒169名のうち8名が職場体験学習に来られた。

旗印は、「生徒一人一人が心豊かたくましく生きる力」をモットーに、今回は「働く」ことを中心とした体験活動を実践することである。そのため、第1歩は生徒自らが牧場職員らとの事前打ち合せによるプラン作成から始まった。



事前打ち合せの様子

両日ともに好天に恵まれ、生徒達は、ウシ、ウマ、ヤギ、ブタの各畜舎で、搾乳や飼養業務に孤軍奮闘し汗を流した。体験先は、人気スポットのショッピングモールを初めとし消防署など多岐に亘っていたが、あえて3Kに分類される牧場体験をして頂いた諸兄・諸姉に、感謝の意を表したい。



授乳業務体験

今後も、こういった企画を積極的に受け入れ、より緑豊かな牧場の活性化と地域貢献をめざしていきたい。

最後に、11月15日（水）は、岩間消防署署員の立会のもと、消防訓練を実施した。想定は、研究実験棟1階学生実験室においてガスバーナーを使った実験中にアルコールに引火し、火災と併せ学生1名が火傷を負ったというもの。消防署員が監視するなか、思うように事は進まず、沢山の辛口を頂いた。次回に向けて反省。その後、初期消火と応急手当をご指導頂き、改めて訓練の必要性を痛感した。



初期消火訓練



心肺蘇生法訓練

大学院工学系研究科・工学部

工学部 2号館でバリアフリー実験を実施

部局

産業機械工学専攻の鎌田教授がプロジェクトリーダーを務める経済産業省・NEDOの「障害者等ITバリアフリープロジェクト」の実験が、11月6日（月）～21日（火）の間、工学部2号館で実施された。このプロジェクトは、視覚障害者等の移動困難者の安心安全な移動を実現するための誘導案内システムを開発し、その案内方法の標準化をはかることを目指して、平成15～18年度に実施されているもので、昨年度の愛・地球博での実証実験のフォローアップの位置づけで、本学内で追加・確認実験が行われた。

実験のためのインフラ設置に関しては、バリアフリー支援室に検証実験をしてもらい、視覚障害者が旧館入口からエレベータまでアクセスできるような誘導ブロックの敷設を行ったほか、支援室の全盲のスタッフが被験者の一人となって実験に参画した。今回の実験では30名の視覚障害者により、開発した統合端末の使い勝手、インフラ設置位置・案内方法の適切さの検証を行った。実験の結果を踏まえて、JISやISOの標準原案の作成作業を行っていく予定である。

松本工学系研究科長も実験の体験デモに加わり、「視覚障害者の移動がこんなに大変だということをあらためて感じ、このような支援機器の研究開発・早期の導入普及が望まれる」とコメントした。情報学環の坂村教授がプロジェクトリーダーを務める国土交通省の自律移動支援プロジェクトも各地で実証実験中であり、これらプロジェクトが連携をはかって実用化が進むことが望まれる。



実験の様子



体験デモ中の松本研究科長

史料編纂所

第三回東アジア史料研究編纂機関国際学術会議開催される

部局

11月10日（金）から15日（水）まで、中国湖北省の武漢において、第三回東アジア史料研究編纂機関国際学術会議が開催された。本会議は、日本・韓国・中国の史料研究編纂機関が、東アジア地域の歴史編纂の伝統と精神を受け継ぎ、自国の史料の編纂と歴史研究で蓄積された情報と史料を共有し、近隣地域の歴史と文化に対する相互理解を深め、学問発展と友好協力の基盤を作ることを目的として開催されるもので、第一回（韓国・国史編纂委員会主催）、第二回（日本・史料編纂所主催）に次いで、中国社会科学院近代史研究所と江漢大学が主催して行われた（原則として2年に1度の開催）。

今回の総合テーマは、「東アジア諸国の史料資源と開発利用」である。11月11日（土）、江漢大学で開幕式が行われ、江漢大学副学長から歓迎の挨拶を受け、代表理事機関として韓国国史編纂委員会委員長柳永列先生、史料編纂所保立道久所長、中国社会科学院近代史研究所副所長虞和平先生らが順に挨拶した。開幕式には、武漢市副市長も列席され、挨拶を受けた。

会議は、6つのセッションに分かれ、上記三カ国のほか台湾からの参加者も含めて21人の報告が行われた。日本側からは、史料編纂所メンバーのほか本学東洋文化研究所の平勢隆郎教授、京都大学人文科学研究所金文京所長、国立公文書館・アジア歴史資料センター牟田昌平氏などが立った。内容は、史料資源の情報学的な開発利用の経験、各国の史料編纂のあり方、東アジア地域の交流史研究などで、活発な討論が行われた。

11月12日（日）の閉幕式においては、虞先生、柳先生、保立所長が今回の会議をそれぞれの立場から総括し、会議が成功裡に終了したこと、次回は韓国主催の順である

こと、今後とも三カ国の歴史関係のアカデミーが友好関係を発展させていくことなどが表明された。

13日から14日には、三峡ダムや揚子江中流地域の民俗文化の見学会が行われ、研究者相互の交流を深めた。



握手を交わす柳先生、虞先生、保立所長（左から）



参加者全員によるテープカット



点灯スイッチを押す西尾副学長、くす玉を割る前田所長

生産技術研究所

部局

「ITS実験用交通信号機」点灯式が行われる

11月10日（金）、生産技術研究所（生研）先進モビリティ連携研究センター（ITSセンター）は、千葉実験所一般公開に併せ、「ITS実験用交通信号機」設置を祝う点灯式を行った。

これは、千葉実験所（千葉市稲毛区）構内に、産官学連携によるITSの実践的研究への利用を目的とした実験用交通信号機を設置したことによるものである。

来賓として西尾茂文副学長をはじめ、藤田隆文産学連携本部長、横井秀俊国際・産学共同研究センター（CCR）長、Ching-Yao CHAN CCR客員教授・U.C.Berkely PATH研究員、田中敏久CCR客員教授・株式会社トヨタマップマスター代表取締役社長を招き、生産技術研究所からは前田正史所長、魚本健人千葉実験所長、池内克史ITSセンター長、須田義大千葉実験所管理運営委員長が出席し、参加者全員によるテープカットと、西尾副学長によるスイッチ点灯及び前田所長によるくす玉で信号機の設置と点灯が祝われた。

今回の信号機設置は、現在ITSセンターが整備拡充を行っている統合交通実験環境「複合現実感交通実験スペース」における実環境での検証実験など、今後の次世代ITS技術開発のための実験フィールド展開の記念すべき第一歩となったことは疑いない。

総合研究博物館

部局

平成18年度「学芸員専修コース」の終了

総合研究博物館では、11月13日（月）～16日（木）の4日間の日程で「学芸員専修コース」を開講しました。

「学芸員専修コース」は、国内の博物館、美術館、資料館、埋蔵文化財センターといった多様な文化教育研究施設で学芸員としての業務に従事する専門職員を対象とし、講義とワークショップを通じて受講生の企画力・技術力の向上を目指す講座です。

「次世代ミュージアムを構想する—新たな知的価値の創出にむけて—」をテーマにした今回のコースでは、本館教員のほか、建築・都市デザインの分野で幅広く活躍する建築家、特色ある活動を行っている美術館の学芸員らが講師となり、無限の可能性を秘めるこのテーマに基づき、それぞれの思い描く次世代ミュージアムを披露しました。

本館での講義に続き、後半のワークショップは小石川分館で行われ、「次世代ミュージアムとはどうあるべき

か」という難題に対し、受講生らは複数のグループを形成してそれぞれの専門性を生かしたアイデアを捻出しディスカッションを重ね、次世代のミュージアム像を模索しました。

講座を終えて修了証書を受け取った受講生からは「大変有意義な研修で、この4日間を通じて得たことを今後の活動に活かしたい」などの感想が聞かれました。



西野嘉章本館教授の講義風景

大学院薬学系研究科・薬学部

21世紀COEプログラム「戦略的基礎創薬科学」
第4回COE国際シンポジウム
900人の参加を得て盛会に終了！

11月13日（月）、14日（火）の両日、安田講堂において「戦略的創薬科学：創薬標的検証、リード化合物最適化から臨床開発まで」の主題のもとに、本研究科COEプログラム（拠点リーダー：薬学系研究科教授 杉山雄一）の主催した第4回国際シンポジウムが900人を超える参加者を迎え、盛会のうちに終了しました。

小宮山総長の挨拶でも述べられたように、本COEプログラム「戦略的創薬科学」は、異なる方向性をもつ種々の科学分野—低分子薬物の合成にかかわる有機化学、分子構造を解明する物理化学、疾患メカニズムや薬効を研究する生物科学など—の統合を見事になしえ、大きな成功を収めました。本プログラムによりアルツハイマー病をはじめとする難病に対する治療薬候補分子が多数創出されたのみならず、様々な分野の基礎科学に多大な進展がもたらされました。本シンポジウムは、そのような薬学研究領域を横断する様々な活動の最先端を伺える発表の場となりました。



冒頭、あいさつを行う小宮山総長

本シンポジウムでは、テーマを(1)リード化合物の最適化、(2)臨床開発の国際化と規制緩和、(3)ケミカルバイオロジーと医薬化学、(4)アルツハイマー病：分子病態とその治療、の4つに分け、それぞれのセッションで国際的に活躍されている著名な研究者からの発表がありました。

薬学系研究科は、本研究科が主導するCOEプロジェクトの「創薬」の旗頭のもとに、先端的科学の進歩をもたらすとともに、人類生活の質の向上に大きく貢献したものと考えております。

最後に、本シンポジウムが多くの参加者を得て成功裏に終了したのは、本学内外の多数の研究者・学生の積極的な参加・協力によるものであり、ここに深謝します。



各セッションにも多くの参加者が訪れました

生産技術研究所

「高知ITSセミナー
～東京大学ITSセミナーシリーズ①
～」開催される

11月14日（火）、高知県立美術館ホールにおいて、生産技術研究所先進モビリティ連携研究センター（ITSセンター）および高知県ITS推進協議会の主催、国道交通省国土技術政策総合研究所、国土交通省土佐国道事務所、高知県、高知工科大学の協賛により、「高知ITSセミナー～東京大学ITSセミナーシリーズ①～」を開催した。

まず第1部として『東大ITSセンターにおける取り組み』と題し、池内克史センター長をはじめとした当センターのコアメンバー（池内、桑原、須田、田中）により、パネル形式でセンターにおける次世代ITS研究開発に向けての様々な取り組みに関する紹介が行われた。



ITSセンターコアメンバー

続いて第2部として、畠中秀人国土交通省国土技術政策総合研究所主任研究官、熊谷靖彦高知工科大学総合研究所地域ITS社会研究センター教授、松井保幸国土交通省四国地方整備局土佐国道事務所所長、久保博道高知県土木部道路課課長ら、各氏による高知県におけるITSへの取り組みの紹介が行われ、最後に第3部として講演者全員によるパネル討論が行われた。パネル討論では中央と地域におけるITS研究開発の違いに始まり、地域のニーズに密着し、少ない予算でより有効性の高い施策を実施するための創意工夫に満ちた高知県における取り組みへの高い評価、更にはそうした取り組みを推進するために当センターの持つ設備と研究成果をいかに活用するかといった期待に議論は大いに盛り上がった。



講演者全員によるパネル討論

その後、関係者により行われた懇親会や翌日の見学会でもそのような議論が引き続き行われ、セミナー終了後ただちに連携研究の企画案が作成されたように、本セミナーは地域ITSを担う人材育成といった目的と同時に、このようなイベントを通じて地域との緊密な連携を産み出す非常に有効な機会となることが改めて確認された。

今回、副題を「東京大学ITSセミナーシリーズ①」としたように、当センターは今後もこのような企画を継続的に実施し、「地域のITS人材の育成」「地域密着型ITSの展開」そして「地域における産官学連携によるITSビジネスの創出」を目指して地域のニーズに即したITS普及促進のために貢献したいと考えている。

大学院総合文化研究科・教養学部

留学生見学旅行を実施

総合文化研究科・教養学部では11月18日（土）・19日（日）の両日、留学生39名と引率者3名、総勢42名で留学生見学旅行を西伊豆にて実施した。

天気心配される中、初日はなんとか持ちこたえることが出来、途中の東名高速道路から雪をいただいた富士山を眺め、最初の見学地、静岡県沼津御用邸記念公園に向かった。園内の菊を鑑賞後、宇佐美に立ち寄り、ミカン狩りを楽しんだ。初体験の留学生も多く、この秋の収穫に皆で舌鼓をうった。

その夜は伊豆長岡に宿泊し、夕食後の懇談会では自己紹介や隠し芸で盛り上がり、この旅行のもう一つの目的でもある親睦を通じての相互理解を大いに深めた。

翌日はあいにくの雨となってしまったが、土肥金山にて、江戸時代の金の採掘現場の様子を見学、その後は一攫千金「砂金採り」に真剣に取り組んだ。制限時間30分を遥かに超過した甲斐もあり、砂金を13個採った猛者もあり、母国へのみやげが出来たと歓声もあがった。

その後、西伊豆の戸田に向けカーブ続きの山越えをし、本学の保健体育寮である戸田寮に向かった。施設見学や御浜海岸の散策を行った後、最後の目的地である修善寺・虹の郷へ向かった。広々とした敷地内、秋雨に濡れた楓の錦色の紅葉は息を呑むばかりの美しさだった。晩秋の光の中、伝統的な日本庭園の探索を楽しんだ。

ここより帰途につき、渋滞による多少の遅れはあったものの全員元気に駒場に帰着し、数々の思い出を残し、見学旅行は無事終了した。

学部1年生から博士課程の学生まで、年齢も国籍もさまざまな学生たちが、西伊豆の美しく色づいた木々や海岸に憩いながら交流でき、非常に有意義な2日間となった。



沼津御用邸記念公園にて



宇佐美でのミカン狩り

東洋文化研究所
第6回東洋文化研究所公開講座
「アジアを知れば世界が見えるーアジアの暦」

11月18日（土）と19日（日）の二日間にわたって第6回目となる東洋文化研究所公開講座が開催された。本講座は、研究所が長年蓄えてきた知的ストックをもとにして多くの方々にアジアを深く知る機会を提供することを目的にしている。



講義の様子

今年度は、「アジアの暦」と題し、アジア各地域の暦の歴史、そして暦と人々の生活とのかかわりなどについて、4名の講師が講義を行った。例年どおり多くの聴衆者を得て、活発な質疑がなされた。各講義の講師とタイトルは以下のとおりである。

第1日目 11月18日（土）13:00～16:30

「古代星図の謎の暦日」

講師 平勢 隆郎（東アジア第一研究部門教授）

「暦と祭りから見たイラン社会」

講師 森本 一夫（西アジア研究部門助教授）

第2日目 11月19日（日） 13:00～16:30

「ミャンマー（ビルマ）の農事暦と農村経済」

講師 高橋 昭雄（南アジア研究部門教授）

「たくさんの暦のある村～ネパール、ビャンスの時間と生活」

講師 名和 克郎（汎アジア研究部門助教授）

大学院教育学研究科・教育学部

部局

図書館団地総合防災訓練開催される (主催：大学院教育学研究科・教育学部)

11月21日(火)14時から約1時間半にわたり、図書館団地(附属図書館、大学院教育学研究科・教育学部、社会科学研究所、大学院情報学環、史料編纂所、大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センター)における総合防災訓練が、武藤芳照総監督(大学院教育学研究科総合教育科学専攻長)のもとで、本郷消防署並びに文京区役所の協力を得て実施された。

当日は、教育学部1階職員休憩室で火災が発生し、避難の際に負傷者が出たとの想定で、教育学部自衛消防隊を組織し、消防署への通報、初期消火活動、授業中の学生の避難誘導及び負傷者の搬送をする訓練を行った。火災の立体モデル、車椅子、消防隊の腕章等をあらかじめ用意し、より臨場感を持たせる工夫を行った。

その後、本郷消防署の指導による消火器による消火実技訓練及びAED(自動体外式除細動器)を使用した応急救護訓練、文京区役所の指導による「起震車」「煙体験ハウス」による地震、火災体験訓練を行い、参加者は説明に真剣に耳を傾けていた。通りすがりの他部局の留学生も起震車等の訓練に急遽参加する光景も見られた。

環境安全本部小山富士雄副本部長及び吉野正巳学生部長らが視察する中で、約100名の教職員、学生が積極的に訓練に参加し、実地体験できたことは意義深いことである。

最後に、本郷消防署関達夫予防課長から「避難する際には、延焼防止のため必ず部屋の扉を閉めて避難するようにしてほしい」との講評、小山副本部長から「防災についての心構え」についての挨拶および武藤総監督から訓練協力への御礼の挨拶があり、訓練は無事に終了した。



消火器による消火実技訓練



AEDを使用した応急救護訓練

大学院人文社会系研究科・文学部

部局

外国人留学生見学旅行を実施

11月23日(木)・24日(金)の両日、恒例の外国人留学生見学旅行を実施した。参加者は、留学生36人、引率の教職員等9人の合計45人。

8時半過ぎに東大本郷の赤門裏からバスで出発。初日から秋晴れの好天に恵まれ、絶好の旅行日和となった。車中から紅葉を楽しみ、途中、野生の日本猿に出くわすハプニング。バスに揺られて約4時間、ようやく到着した福島県下郷町の『塔のへつり』を目の前に遅い昼食を済ませ、留学生旅行の最大の目的である『大内宿』に移動。山間にひっそりとたたずむ村、下野街道『大内宿』は、江戸時代の宿場を今に残す、全国でも数少ない、国重要伝統的建造物群保存地区である。各々が赴くままに集落を散策し、江戸時代にしばしタイムスリップ。その後、宿泊地である会津東山温泉に到着し、夕食を兼ねた懇親会を行った。和やかな雰囲気の中、参加者相互の親睦を深め、福島県民謡である会津磐梯山、さらには踊りも飛び出すなど、楽しい時を過ごした。



塔のへつりにて

翌日も寒風が吹く中ではあったが好天に恵まれ、戊辰戦争で悲劇の舞台となった『飯盛山』、『戸ノ口堰洞穴』、『螺堂』、『白虎隊記念館』と『鶴ヶ城天守閣』を見学。昼食後、北は磐梯山、南は猪苗代湖の美しい水面、さらには湖周辺の田畑に飛来し羽を休めている白鳥の群れを眺めながら、最後の見学地である『野口英世記念館』と『会津民俗館』に到着。野口英世博士の生家、数々の功績等と300年前の中流農民の民家や民具等を見学し、15時過ぎに帰路についた。バスは予定どおり7時前に本郷構内に到着。こうして今年の見学旅行は、日本の地方都市の歴史と文化、美しい自然を実感しながら、留学生同士の触れ合いなど、参加者に多くの思い出を残し無事終了した。



鶴ヶ城にて

地震研究所

第15回一般公開・公開講義を開催

部局

「知って、備える」をテーマに、11月24日（金）、地震研究所は、一般公開・公開講義を開催した。平日にもかかわらず、新棟披露を兼ねた1号館の一般公開には約400名、安田講堂で開かれた公開講義には約500名の方々が来場し、最新の地震学・火山学に関する展示や講義を堪能した。

公開講義の前半は、「知って」に対応したもので、山岡耕春教授が、『映画「日本沈没」に見る地球科学30年の進歩』について講演。この夏公開された「日本沈没」の科学監修を担当した同教授は、日本が沈むという極端なシナリオの下で映画に科学的な正確さを与えるための苦労話を紹介しつつ、最新の地球科学の成果をやさしく語った。講義の後半は、「備える」に対応したもので、昨今社会的にも関心の高い『建築構造物の耐震性能と耐震補強』について、第一人者である壁谷澤寿海教授が、学問的な背景を踏まえて解説した。兵庫県三木市にある世界最大の振動台（防災科学技術研究所）を用いた実物大の建物破壊実験の話は、会場の耳目を集めていた。

本郷キャンパス最北端にある地震研究所1号館の一般公開では、建物を支える地下の免震構造の見学、地震研究所が進めるプロジェクトの紹介の他、院生が中心となって企画した実験展示等を行った。中でも、空気圧で水槽の底を上下させ、津波の押し・引き波を再現できる津波発生装置、浅間山火山観測所の小山悦郎職員が40年間撮り貯めてきた火山の写真展が人気を集めていた。

地震研究所の一般公開・公開講義は、研究成果を広く社会・地域に知って頂くため1992年より毎年開催しており、今年で15回目となる。例年夏に実施しているが、今年は1号館の竣工や旧本館の耐震工事の関係もあり、11月の開催となった。夏休みではなかったことから、例年より若い世代の参加者は少なかったが、それでも授業が終わって駆けつけた生徒さんもおられ、会場は老若男女でにぎわった。

なお、一般公開で展示したもののうち、津波発生装置や「日本沈没で田所博士がなめた石」等は常設展示しており、いつでも見ることができる。

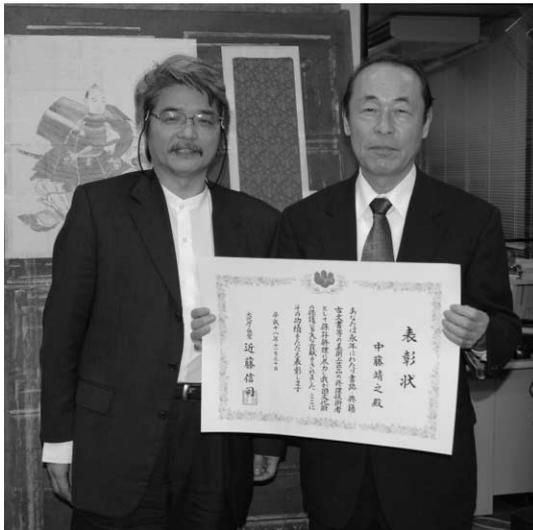


地震研究所1号館の一般公開



安田講堂で開かれた公開講義

11月30日（木）、史料編纂所史料保存技術室の中藤靖之技術職員が長年にわたる史料修復業務における功績により、文化庁長官表彰を受けた。これは長年の文化活動により顕著な業績を挙げた芸術家・文化人等に対して文化庁長官が表彰するものであり、今回、他に大山のお代氏らも表彰された。



中藤技術職員(右)と保立所長

史料編纂所史料保存技術室は、影写室・模写室・写真室・修復室という四つの室を擁する日本で唯一の歴史学・史料学に関係する総合的技術組織であるが、各室は史料の原秩序を尊重し、安全で細心な史料原本の取扱を行うことを必須としており、その中でも修復室は基礎を支える室として位置づけられている。また史料編纂所のような歴史学の研究所にとっては、史料原本を上記のような原則にもとづいて取り扱う上で、専門的な技術をもった修復室技術職員の存在は大きな意味をもっている。

中藤技術職員は昭和41年以来勤続四十年で、これまでに蓄積された技術・知識や実施された修復事業のレベルはきわめて高く、研究者と共同しつつ、影写・模写・写真などの他の分野の技術職員とともに修復技術を伝習・公開・蓄積する点で大きな役割を果たされてきた。長い間、先人たちによって守り伝えられてきた技術・知識の習得に努められる一方、関連各方面から最新の情報を得て業務に活かす努力も続けられ、独自に考案・製作された用具や手法を数多く業務に取り入れてこられた。

さらに、それらの技術や知識を集大成された著書『古文書の補修と取り扱い』（神奈川大学日本常民文化研究所監修、平成10年、雄山閣出版）を上梓された。これは、史料修復に直接従事する者が著わした数少ない著書のひとつであり、国内外の史料保存関係者から高い評価を受けている。教育活動にも度々従事され、本学内では史料

編纂所主催史料学セミナーや東京大学附属図書館職員研修における「原本の取り扱いと保存」などの講師を務められ、学外では大正大学・日本女子大学などで文化財保存等の講義・実習を担当されている。また、神奈川大学日本常民文化研究所などで修復技術を指導され、史料保存対策の促進にも貢献されている。

数多くの史料修復作業を通じて原本史料修復の重要性を周囲に認識させるとともに、関係諸団体・機関に出向いて積極的に自らの技量水準を高め、その成果を著書や実地教育を通じて大学教育・社会教育に反映させてこられた功績は極めて大きい。



執務中の中藤技術職員

大学院農学生命科学研究科・農学部

動物慰霊祭

部局

12月1日（金）11時から弥生キャンパス内にて、平成18年度動物慰霊祭が執り行われた。農学生命科学研究科では数多くの動物が実験・研究用として供され、生命科学の発展に大きく寄与している。

当日は熊谷獣医学専攻長の挨拶に引き続き、参列者が動物の霊に思いをいたし献花を行った。12月とは思えぬ穏やかな天候のもと、学生を中心に200名を超える参列者であった。



慰霊碑に献花する熊谷獣医学専攻長（写真左）

大学院教育学研究科・教育学部

教育学部附属中等教育学校で濱田純一副学長の特別授業が行われる

部局

12月1日（金）教育学部附属中等教育学校において、濱田純一副学長特別授業「メディアと法」が行われた。約60名の生徒、保護者、教職員が熱心に聴講した。

まず、濱田先生の自己紹介から始まった。現在の所属する「大学院情報学環」について説明があり、「たこつぼ」型の研究から領域をまたがる「学際」的な研究へと変化していることが話された。

次に、今日のテーマである、メディアや法を主体的に「使いこなす」ことと、そのためにその仕組みを知ることが提示された。

メディアと法の研究の柱は、①メディアの自由と法による規制のバランスとそのテクニック、②メディアが社会でうまく利用されていくための仕組み、の2つである。①の事例として、表現の自由と個人の名誉を天秤にかけ、バランスをとることが重要であり、「公共利害」「公益目的」「真実性」といったことがポイントになる。無限にある個々のケースに対応するには基準をつくるなどルール的一般化が構築されないといけないと述べられた。②

の事例として放送制度を取り上げ、テレビ放送では放送コードがあり、公共良俗・政治的公平が求められるが、新聞では政治的公平に規制がないことが説明された。

さらに、「メディアの特性」について言及された。電話などの通信手段は特定された相手と1対1で行われるが、テレビなどの放送は不特定多数が受け手となるので、発信者には免許制が敷かれ、また発信する内容も政治的公平性が求められる。プル型のインターネットとプッシュ型のテレビ放送の規制の有無について、図を板書しながら解説された。しかし、制度的には未解決な点があることを添えられた。

最後に「法の特性」について、最新の最高裁の判決文を紹介し、取材時の情報源の保護に関しては、諸事情を比較衡量して決めるべきであることを示された。

生徒からの質問に対しても、わかりやすい説明をされた。終わりに、三橋俊夫副校長は、「情報が多なかでその選択や、情報を扱う際のモラルが今後の個人の課題である」と意見を述べた。



濱田副学長の講義の様子

海洋研究所

ジャズコンサート開催

部局

海洋研究所では、厚生委員会活動の一環として12月4日（月）夜、ミジンコ研究家としても有名なジャズミュージシャンである坂田明氏（アルトサクソフーン、クラリネット）を始め、廣木光一氏（ギター）、バカボン鈴木氏（ベース）をお招きし、所内講堂にてJAZZ in ORI (ORI: Ocean Research Institute) と題し、ジャズコンサートを開催した。



噴水



演奏風景

今回のコンサートのきっかけは、坂田氏がミジンコ研究を通じて、プランクトンが専門分野である寺崎所長とは旧知の仲であったことによるものである。初めにDVDを使った坂田氏のミジンコについてのトークがあり、専門的な解説の中にも、ユニークな人生観を交えた洒落な語り口が参加者の笑いを誘った。

続いて海洋研の名にふさわしく、海に関わる坂田氏のオリジナル作品を含む「水母～A good for nothing」、[Ballad for Taco] 等7曲が時には歌も交えながら演奏された。ステージから奏でられる、時にしみじみと心に語りかけ、時に魂を揺さぶるようなサウンドに全員が酔いしれ、充実した時間を共有した。アンコールのイタリア映画「ひまわり」テーマ曲が終了した時には拍手が鳴り止まず、感動で満ち足りた興奮に会場が包まれた。

会場は大学院生等が若い感性で設営を行い、普段のアカデミックなイメージの講堂とは思えない雰囲気であった。また、用意した椅子は満席となり、立ち見が出るほどの盛況であった。



熱演する坂田氏

教育学部附属中等教育学校の生徒が 税の作文で各賞受賞！

平成18年税についての作文（全国納税貯蓄組合連合会主催 国税庁他後援）にて、教育学部附属中等教育学校61回生波多野未佳さん（1年）が、（財）大蔵財務協会理事長賞を受賞した。また、同じく塚本愛さん（1年）が、東京国税局管内納税貯蓄組合連合会会長賞に、そして増子杏さん、吉澤清夏さん（1年）も中野納税貯蓄組合連合会優秀賞に選ばれた。

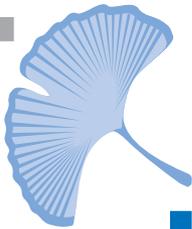
波多野さんの賞は、応募総数46万余編の中から選ばれた30編のうちの一つである。1年生では、授業で税に関する内容を学んでいないため、波多野さんは税金についてインターネット等で自ら調べて書き上げたという。税金のない国もあるが、資源のない日本では税金は欠かせないものであるといった内容が、評価された。

塚本さんは、税金が公共施設等のみならず、予防接種等といった生きていくために必要なものも対象にされていることについて、自分の視点から考えを述べた点が評価された。

表彰は全校集会において、大蔵財務協会の堀越理事長、中野納税貯蓄組合連合会の吉田会長よりそれぞれ直接手渡された。



(教育学部附属中等教育学校)



本学では、毎年5月と11月の年2回、同月1日現在の学生数を調査し「学内広報」に掲載している。本年11月1日現在の学生数は次のとおりである。

平成18年11月1日現在 学部学生・研究生・聴講生数調

種別 入進学 年度別 性別	在籍者												在籍者のうち、外国人学生 及び休学者			研究生のうち 外国人 (厚掲)			聴講生																															
	平成18年度		平成17年度		平成16年度 (以前)		平成15年度		平成14年度 以前		小計		合計		外国人学生		休学者		研究生		外国人		聴講生																											
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女																										
	2,523		633		2,536		621		364		30		5,423		1,284		6,707		128		56		184		52		7		59		-		-		-															
前期課程・教養学部	320		118		494		133		264		43		-		1,078		294		11		8		19		16		6		22		-		-		-		12		14											
後期	80		22		87		16		87		13		78		19		12		5		344		75		419		0		0		6		1		7		18		7		25		0		0		-		-	
健康科学・看護学科	8		8		20		16		2		1		-		-		-		30		25		55		0		1		1		0		0		6		12		18		0		0		-		-			
工学部	874		90		843		66		142		5		-		1,859		161		2,020		47		11		58		26		2		28		8		3		11		2		1		3		6		1		7	
文学部	212		135		217		127		126		37		-		555		299		854		7		10		17		9		11		20		2		3		5		0		0		-		-					
理学部	244		34		258		27		40		2		-		542		63		605		9		4		13		11		0		11		0		1		1		0		0		6		0		6			
農学部	200		55		195		66		32		7		-		427		128		555		4		4		8		5		1		6		4		10		1		1		2		0		0		0			
課	22		10		19		12		20		10		19		11		1		0		81		43		124		0		0		0		0		0		0		0		0		0		-		-			
経済学部	290		65		284		60		92		8		-		666		133		799		7		12		19		13		3		16		-		-		-		-		-		-		3		0		3	
教養学部	106		56		138		56		58		29		-		302		141		443		7		6		13		10		7		17		2		2		4		0		0		9		9		18			
教育学部	55		52		71		42		20		10		-		146		104		250		1		1		2		5		3		8		3		1		4		0		0		-		-					
薬学部	64		24		58		36		1		1		-		123		61		184		3		0		3		0		1		1		0		3		3		0		0		0		1		1			
小計	2,475		669		2,684		657		884		166		97		6,153		1,527		7,680		96		57		153		101		35		136		45		36		81		3		2		5		36		13		49	
合計	4,998		1,302		5,220		1,278		1,248		196		97		5,111		2,811		14,387		224		113		337		153		42		195		45		36		81		3		2		5		36		13		49	

備考) 1. 農学部の上段は獣医学課程を除く各課程の合計数を、下段は獣医学課程の数を示す。
2. 平成16年度(以前)の欄については、医学部医学科・農学部獣医学課程は平成16年度入進学者のみ、他の学部学科は平成16年度以前の入進学者を示す。

支援のこころ

大学院医学系研究科生体物理学専攻
システム生理学教室 博士課程一年
小児科医 熊谷晋一郎さん



「次の方、どうぞ。」

診察室に、5歳くらいの男の子が、母親に連れられて入ってくる。

「今日はどうしました？」

と、私が言い終わらぬうちに、透明な眼のまま子供が問いかける。

「先生どうしたの？手が曲がってるよ。痛い？なぜ車に乗ってるの？」

あわてた様子の母親は「だめよ。」といいかけるが、子供との率直で誠実な空間が好きなのは（子供が好きというよりこの空間が好きなのだ）、母親を諫めその子の質問に答えていく。

「生まれたときに頭を怪我したから手や足が動きにくくなったんだよ。今は痛くないよ。この車は足の代わりだよ。行きたい場所に行くためにね。ここにある棒みたいなものを触ると動くんだよ。」

「ふーん。」と言いながら、子供は矢継ぎ早に質問を繰り返す。子供を突き動かすのは、価値観とは無縁の透明な好奇心だ。子供の私に対する障害理解は急速に深まっていく。私の私自身に対する障害理解も整理されてくる。➤

ひとしきり質問をし終わり、診察を始めようと聴診器を子供の胸に当てようとしたとき、手を滑らせて聴診器を落としてしまった。すると、子供はしゃがみこんで聴診器を拾い、そっと自分の曲がった手に渡してくれた。小さな両手が私の手を優しく、慈しむように包み、ふわりと聴診器が私の手に納まった。その瞬間、私は心の中に波立つものを感じた。めったに誰も触れてくれない心の深い場所にある乾いたところに、この子は優しく触れた。これは愛なのではなからうか？

私たちは他者に、正義や愛といった大義名分を押し付けがちだが、それはしばしば、相手の主体性や機微を蔑ろにする。男の子をはじめ突き動かしていたのは、大義名分などではなく好奇心だ。そして、愚直に、知性的に、私を理解しようとした。その営みの果てに、一瞬「彼自身の」愛が立ち現れた。愛が知性的理解を促すのではなく、知性的理解が愛を生んだのだ。決して難しいことではない。子供が簡単にやってのけていることだ。

まず「人」として・

バリアフリー支援室教務補佐職員 鈴木真澄さん



自身も「全盲」でありながら、「だからこそ出来る支援があるだろう」とバリアフリー支援室で仕事をさせていただくようになって間もなく1年になります。ブラインド(視覚障害者)をとりまく機器の発達により、PCを使っのメールの送受信やWebの閲覧、テキストのみの文書作成についてはほとんど不自由を感じることなく出来るようになりました。

しかし、やはり「文書のレイアウトを整える」ことや「スムーズな移動」には壁があり、そんな時は「支援者」の方のヘルプをもらって仕事をしています。私は現在はブラインドですが、11年前までは晴眼者(見えている人)でしたので、「晴眼者とブラインド間のバリア(壁や誤解)」が ➤

他の人より『よく見えます』。それを少しずつ埋めながら自分が働きやすい環境を整えていくこと、これはつまり支援室の仕事です。一石二鳥ということでしょうか。

ただ、この「環境を整える」のは非常に難しいのが現実です。障害を持った人の感じる壁が果たして本当に「出来ないこと」なのか? 「したくない事」と混同していないか? このあたりの見極めが本当に難しいと感じる昨今です。私は当事者であるが故に、この見極めの際の線引きが「きびしすぎてしまう事」もあるようで、極力公平な目で判断するように心がけています。

私は支援室で仕事をするようになって、今までよりも強く「社会人として、人として」を考えるようになりました。「見えるから、見えないから」の前にあるものの大きさ。物事に当たるには本当に様々な角度から物を見て考えていく必要があるということ、そして考えるための情報を出来るだけ多く取り込む必要があること、これは「見えなくなったからしている事ではなく社会人として、人としてする事」だということを痛切に感じています。

<東京大学バリアフリー支援室 連絡先> E-mail: spds-staff@mm.ito.u-tokyo.ac.jp

本郷支所(理学部旧1号館135号室): TEL 03-5841-1715 FAX 03-5841-1717

駒場支所(先端科学技術研究センター3号館503号室): TEL:03-5452-5067 FAX:03-5452-5068

さすてなTimes vol. 7

IR3Sを支える裏のネットワークづくり
 + 次回公開シンポジウム告知

手塚安澄
 研究協力部サステナビリティ学
 支援グループ

さすてなTimesも今回で7回目。サステナビリティ学連携研究機構（IR3S）という新しい組織について、理解を深めて頂いた頃なのでは？ 部局横断型組織であり、その取組みも多岐に亘るIR3Sですが、組織の運営には事務体制の整備も欠かせないという配慮から、事務的サポートをする部署がIR3S設置と同時に研究協力部内にできました。

IR3Sの活動は東大の部局間だけでなく、全国の参加大学（京大/阪大/北大/茨城大）と協力機関の連携によって行なわれています。各大学に、形態こそ様々ですが、裏方で支えるスタッフの存在があることを忘れてはいけません。活動が本格始動して実感するのですが、こうしたネットワーク型プロジェクトの形成には、研究者同士は勿論、各機関のスタッフの連携も必要不可欠なのです。特にIR3Sの運営は振興調整費によるため、経費の使用に当たって大学間での連絡は日常的に行なわれています。大学で使う事務用語は全国共通だと思っていたのですが、旅費の「精算払」という言葉の用途が違ったために、京大とのやりとりで混乱したこともありました。こんな些細なことでも、時にコミュニケーションの障害になり、見落としせば適正な経費執行の落とし穴にもなりかねません。研究ネットワークを形成する苦労は、実はこのように機関を超えてスタッフ間の連携を作り上げなくてはいけない点にも及ぶのです。

そんなIR3Sを支えるスタッフらが、日頃の業務に加えて一致団結して切り盛りしなければいけないものにシンポジウムなどのイベント開催があります。

今年2月に第1回IR3S公開シンポジウム「サステナビリティ学が拓く地球と文明の未来」を開催した際は、初めての大会イベントで、スタッフも手探りで準備をしましたが、小池前環境大臣を迎え、安田講堂に立ち見が出る程の盛況ぶりで無事終えることができました。

そして次回開催の期待の声にこたえて、IR3Sは今年度もやります、第2回公開シンポジウム！詳細は後日、本誌にて案内させて頂く予定ですが、川口順子参議院議員や奥田碩トヨタ自動車取締役相談役（いずれも予定）等、国内外の著名な識者を迎えて、第2回IR3S公開シンポジウム「資源と環境が支える地球と人類の未来（仮題）」（平成19年2月3日（土）於・安田講堂）を開催します。乞うご期待！



今年2月のシンポジウムの様子

と同時に、我々スタッフの苦労が再び始まります。これもIR3Sの重要な社会へのアウトリーチ活動の一環、ひいては世のため人のため。満席の安田講堂、そして受講者の皆さんが満足して帰る姿を見たいがために、私たちは残り2か月準備に追われるのであります…。

調達本部です



第20回 調達改善効果の算定

今回はちょっと固いお話です。調達改善重点分野ごとの対策が出揃うにつれて、いよいよその効果のほどが問われることとなります。調達改善の効果算定というのは結構難しい問題です。特に、それが自箇所の予算の増減に関係づけられる場合には、誰もが真剣にならざるをえなくなります。

調達改善施策の効果ということですから、同一契約について調達改善に取り組む前の契約価格を「基点値」として、改善手段を講じた後の契約価格との差額ということになります。最も単純な事例とすれば、毎年度定例的に発生する役務契約、あるいは常時購入される物品などに関して、調達改善着手以前の「前回契約」価格と改善後の価格を比較ということになります。

一方、継続的でない事柄については、何を基点値とするかにはいくつかの考え方が出て参ります。例えば、全く同一とはいえないまでも類似する過去の契約価格、サプライヤが示した当初見積もり価格、さらには予算部署による一定の査定を経た予算額を基点として用いる場合もあります。

算定理論としては上記のようなことなのですが、ひとつ単純な例としては、繰返し購入する物品で購入数量に差があるという場合で、その物品の1個当りの単価が変わらなければ購入数量の変更に伴う購入総額の差でしかなく、調達改善効果とは認められません。

また、継続的な契約といった場合にも、現実には「全く同じ契約」というものは意外と存在しません。購入物品の微妙な性能向上、機械化による作業内容の変化、インフレなど物価水準自体の変化などなど、調達改善以外の価格変動要素はいくらでもあります。実際の契約価格を比較しようとする、それらが複雑に絡んで来るのが実態です。調達改善効果は、それら複数の要素による価格への影響を全て加減しなければ正確には求められなくなってしまいます。

しかし、営々とその計算に向かうことには必ずしも賛成できません。端的に言えば、基本的な仕様の変更（例えば「清掃面積、平米単価の変更」）など、比較的簡便な方法で算出でき、しかも價格的に無視できない影響を及ぼした要素にとどめるべきだと考えます。調達改善の目的は、正確な調達効果の数値を求めることではないからです。

契約価格の差が全く他の要素から成っているのに、それを「調達効果」と言い張るのは問題ですが、調達効果の正確な算定にあまりに手間ひま（コスト）をかけることは、せっかくあがった調達効果を目減りさせてしまうことにもなりかねません。

調達本部連絡先 ☎22148 櫻井

東京大学Proprius21のご紹介

価値創造型共同研究創出

東京大学憲章(平成15年《2003年》3月18日、評議会制定)で第一章の「学術」において、第一節の(学術の基本目標)で「(東京大学は)研究が社会に及ぼす影響を深く自覚し、社会のダイナミズムに対応して広く社会との連携を確保し、人類の発展に貢献することに努める。」と述べ、第9節に以下のように理念を具体化しています。

9. (研究成果の社会還元)

東京大学は、研究成果を社会に還元するについて、成果を短絡的に求めるのではなく、永続的、普遍的な学術の体系化に繋げることを目指し、また、社会と連携する研究を基礎研究に反映させる。東京大学は、教育を通じて研究成果を社会に還元するため、最先端の研究成果を教育に活かすとともに、これによって次の世代の研究者を育成する。

Proprius21は、上記理念を産学連携で具現化するものです。小宮山宏総長は、本年度の産学官連携サミット(2006年11月20日開催 於 赤坂プリンスホテル)のパネルディスカッションにおいて、「日本発イノベーションの創出」と題した発表の中で、東京大学Proprius21について、次のように紹介されました。

「東京大学Proprius21」産学連携でテーマを作る。

- ① ニーズは作るもの
- ② シーズは作るもの
- ③ 計画を練る。

Proprius21実施において、具体的には以下の2段階を経ます。

<段階1>産業界と本学研究者が計画の基礎検討段階から討議を重ね研究者の探索とテーマの絞込みを行い、チームを形成します。これまでのケースでは、企業側による産学連携の可能性を検討したい分野の提示から始まるのが大半でしたが、学内研究者からの提案も常時お受けしております。

<段階2>共同研究の計画を産学共同で作成します。これは産学双方の期待のミスマッチの未然防止、研究開発の役割分担の明確化、産学双方が納得した開発スケジュールの作成を意図しています。これにより、産学相互に、テーマについての理解促進、ボトルネックの所在の明確化、必要なメンバーの追加などが可能となり、質的に進化した「成果の見える共同研究創出」へと繋がります。計画の完成、あるいはその課程で共同研究企業の経営陣にもご出席いただき、企業の技術戦略に位置づけるべくレビュー会議を開催します。企業と大学側研究者の合意の確認のもと、本番の共同研究を開始します。

なお、現在までのProprius21実績としては、終了11件、中止2件、現在実行中は18件です。詳細は下記サイトをご覧ください。
<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/proprius21/index.html>

Proprius21の実施例

実例の一つとして、既に終了しています、松下電器産業株式会社とのProprius21「生活支援ロボット」を紹介させていただきます。

実施に向けて、まずは、下記内容について、企業側から大学の研究者に向けての提案を行って、研究者の公募(産学連携共同研究の学内パートナーを探索する方法の一つ)を行いました。応募部局、合意内容等、概略は下記の通りです。

公募内容:『人や環境に対応し、生活の質の向上を目指す生活支援ロボットを開発するための、コンセプト、デバイス、情報処理技術、統合技術などの共同研究提案』

応募部局:情報理工学系研究科、新領域創成科学研究科、工学系研究科、先端科学技術研究センター

合意内容:

3テーマ(センサー関連、マニピュレーション関連、センサー融合技術関連)

当初の提案書の内容から大きく質的に発展した内容となり、研究費は総額1億円以上

共同研究開始:2005年8月より共同研究を開始しました。

その後、平成18年度(2006年度)の科学技術振興調整費「先端融合領域イノベーション創出」で採択された「少子高齢社会と人を支えるIRT基盤の創出」の一つの軸となって、大型の産学連携プロジェクトに発展しました。



松下電器産業(株)とのProprius21レビュー会議

◇発表者募集 [シーズ実用化提案会][プロジェクト提案会]
産学連携のパートナーをご希望の方はご連絡ください。

連絡先:産学連携本部(研究協力部 産学連携課)

電話:内線22857(外線03-5841-2857)

ホームページ:<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

※「東京大学トップページ」上で「産学連携本部」をクリック

洋弓部

アーチェリーは30M~90M先の的を狙って射つ単純明快かつ奥の深いスポーツです。そして私たち洋弓部はそうしたシンプルなスポーツに魅せられた者たちの集団です。満足のいく射が的の中心である金色の得点帯に吸い込まれていく喜びは言葉で形容しようありません。部員は切磋琢磨しつつそのような喜びを共有することで堅い紐帯で結び付けられていくのです。



部員は大半が未経験者です。しかしながら、夏学期の間に駒練と呼ばれる練習を上級生から施されることにより無理なくアーチェリーに必要な知識・技術・基礎体力を手に入れます。そして秋には新人戦で関東学生の上位に食い込み、翌年春の

リーグ戦ではトップアーチャーと対等に戦えるまでに成長するのです。

その後は週1度皆が集まって持てる力をすべてぶつける場である公練を核として、各人が各々の必要に応じて自主練習に励み、さらなる高みを目指します。

残念なことに、私たちは昨年のリーグ戦において2部降格の苦杯をなめました。今年のリーグ戦でも奮闘及ばず1部昇格を逃しました。私たちはこのような状況を脱しさらなる飛躍を遂げるべく、臥薪嘗胆の思いで部内改革に取り組み練習に励んでいます。

来年春には一回り大きくなり飛躍を遂げた姿を皆様に見せられるよう全力で頑張りますので、より一層のご支援をよろしく願います。

(洋弓部 水野 智成)



★★DATA★★

創立：1971（昭和46）年
 部員数：21人
 練習場所：世田谷公園
 練習日：土（公式練習）
 年間予定：6月 六大学2年生戦
 7月 国公立王座決定戦
 8月 個選 夏合宿
 9月 七大戦 秋合宿 インカレ
 10月 六大学定期戦 国公立新人戦
 11月 学連新人戦
 12月 納射会 インドア
 3月 春合宿
 3月~5月 リーグ戦
 活動実績：リーグ戦2部2位、国公立王座決定戦2位、七大戦5位、六大学定期戦3位
 部長：山口 英男（史料編纂所教授）
 監督：猪野 哲夫
 HP：http://ut-archery.jp

B & W部

ボディビルアンドウェイトリフティング部は、すでに創立以来40年を数える伝統深き部である。現在は25名の部員が、月・水曜日の16時30分、土曜日の11時から駒場トレーニング体育館にてトレーニングをしている。

年間を通しての活動は、5月に関東と全日本、そして11月に関東のパワーリフティング大会が行われ、10月に関東・全日本ボディビル大会が催されている。



他のスポーツと比べて試合が少ない印象を受けるが、一度の試合の前には数ヶ月前から準備をしなければならないスポーツであり、また年間を通しての絶え間ない努力なしではすぐには結果が出ない過酷なものである。

過去、当部は第22回関東学生ボディビル大会から団体表彰を12年連続で勝ち取った栄光もあったが、以降勢いを失いつつあった。しかし学生全日本2連覇の佐々木卓選手の活躍もあり、現在は関東団体3連覇、来年以降に結びつく流れをつくった。

また春の関東パワーリフティング大会では初の団体優勝を得るなど、今まさに黄金時代といっても過言ではない、輝きの中にある部である。

(B & W部 岩本 陽平)



★★DATA★★

創立：1964（昭和39）年
 部員数：25人
 練習場所：駒場トレーニング体育館
 練習日：月・水 16:30~、土 11:00~
 年間予定：5月 関東・全日本パワーリフティング大会
 9月 4年生引退、合宿
 10月 関東・全日本ボディビル大会
 11月 関東パワーリフティング大会
 活動実績：関東パワーリフティング団体優勝
 全日本パワーリフティング60kg級個人優勝
 関東ボディビル団体3連覇
 全日本ボディビル個人2連覇
 部長：石井 直方（大学院総合文化研究科教授）
 HP：http://wiki.livedoor.jp/hikikomori2/d/FrontPage

編集：学生部学生課体育チーム (内)22510

ワタシのオシゴト

第5回

Rings around the UT

農学系教務課教務第三係長

山崎 泰生 さん



第9回

~広報センターより~



不思議な建物

本郷構内で「あれは何でしょう？」と尋ねられるものがいくつかあります。そのひとつ、浜尾新像の東側に位置する建物をご紹介しようと思います。（*下記参照）

何だろう？とたしかに私も気になっていましたが、『帝国大学新聞』に見つけました！題して「池の端の樹蔭にしゃれたポンプ」（昭和3年10月15日付第267号）。記事は、三馬力の電力で池の水を吸い上げる、撒水用のポンプが現れたと伝え、当時の道行く人の目にもちょっと不思議に映ったようです。また、次第に竣工していく学内の道路やガーデンへ常に湿りを与えるために作られたものと説明しています。

関東大震災から5年。総合図書館の竣工も真近の頃です。復興整備が盛んに進められ、土ぼこりの立つ構内だったのではないのでしょうか。そのような状況の中で、このポンプは大いに活躍したに違いありません！

ところで、どのように水を撒いたのか気になりました。以前ご年配のお客様から聞いたことがあります。「昔は職人が、箱を載せた荷車のようなものを引いて歩いて、道に水を撒いていたそうだと。まさにその様子を教えてくれるのが、竹久夢二の童話『春』（大正15年刊行）の中の「日輪草（ひまわりそう）」です。

【三宅坂の水揚げポンプのわきに、一本の日輪草が咲いていました。～略～熊吉という水撒人夫がありました。お役所の紋のついた青い水撒車を引張って、毎日半蔵門の方から永田町へかけて、水を撒いて歩くのが、熊さんの仕事でした。熊さんがこうして、毎日水を撒いてくれるから、この街筋の家では安心して、風を入れるために、障子を明けることも出来るし、学校の生徒達も、窓を明けておいてお弁当を食べることが出来るのでした。】

お話の中には、水撒きをしている挿絵も描かれています。（『竹久夢二文学館第9巻 童謡童話集Ⅱ』より）

東大構内に、このような仕事人がいたかは定かではありませんが、同様の方法で水を撒いていたのではないのでしょうか。その姿を思い浮かべたとき、その時代に生きた人々の温もりや営みを感じたような気がしました。

～次回へ続くかもしれない!?～



三四郎池脇のこのポンプです



正門



ネズミも笑う

弥生キャンパス農学部3号館、その1階にある学生サービスセンター。教務課の一日は朝礼から始まる。

「おはようございます…それでは今日もよろしくお願いします。」

カウンター越しのホールには、もう何人かの学生が掲示物を物色している。各係が横一線に並ぶ布陣、うーん美しいと思いつつ教務第三係の席に着く。

担当する学部・大学院の窓口的存在。学生や教員と直接話し、物事を進めることが多い。外部からの照会事項も多い。中でもテレビ局からの質問には興味を引かれる。

「某テレビ局の某番組の企画担当ですが、ネコは笑いますか。」

笑いますよ。と答えるところであった。だが、科学的な根拠による回答を求めている冷静かつ強引な相手、あいまいな返答はできない。心当たりの先生にそれとなく聞いてみると……。

「ネズミは笑いますよ。」

テレビ局員と先生の会話が聞いてみたかった。

ふと、1氏の山小屋にいた不幸なネズミの顔を思い出した。

そろそろ動物慰霊祭の予定を決めねば。



血液型：O型

自分の性格：筋肉質

出身地：神奈川県
横須賀市

次回執筆者のご指名：

高橋麻美子さん

関係：秘密

一言紹介：

マリーゴールドです
(明るく賑やか)

最近は何仕事がないのでさぼりがちなのですが私の所属するミドレンを紹介します。

農学部園芸同好会（通称ミドレン）は花や木や土をこよなく愛する者たちの集まりです。農学部3号館中庭は平成16年5月から整備を始めて、ウッドデッキ、花壇、レンガ歩道等を造りました。生協食堂と隣接しているため、昼は昼食、夜は各種パーティーなど憩いの場として大いに利用されているところです。

詳しくはミドレンホームページをご覧ください。

<http://www.geocities.jp/midorangers/>

■ 駒場祭に出店しました！！

駒場祭 3日間開催のうち、11月25日（土）、26日（日）と2日間出店しました。

学外の方を中心にテントは賑わいました。寒さにも負けず、販売スタッフの学生は研究成果を商品化したものをお客様へ頑張ってお説明していました。今回も、商品の搬入から、テント貼り、商品の撤収まで駒場の職員のみなさまのご協力いただきました。誠に感謝いたしております。本当にありがとうございました。おかげさまで、前年度を超える売上げとなりました！！



<売上個数ランキング>

1位	シャープペン	200
2位	ポストカード	111
3位	ボールペン	76
4位	光触媒シート(4枚セット)	44
5位	歴史クリアファイル	41
6位	クリアファイル(カラー)	30
7位	レポートパッド	27
8位	ナイロンバック	26
9位	チャーム付ストラップ 白	22
10位	大学ノート(A6)小:グレー	21

光触媒シートはテレビや雑誌などでの紹介を見て知ってた！！というお客さまが多かったです。

<ちょっと付けたし>

実は、この11月でコミュニケーションセンターが設立されてからちょうど2年を迎えました。

大学が運営する「オフィシャルグッズショップ」。大学としても初めての試み、私事ではございますが、店長業務も初めて、正直どうなるか不安でした。しかしながら、学内、学外のみなさまのお力添えがあったからこそ、認知度もあがり今を迎えられていると感謝の気持ちでいっぱいです。まだまだ未熟ではございますが、今後ともご指導、ご鞭撻よろしくお願い致します。

(担当：コミュニケーションセンター 辻)



東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

The University of Tokyo

OPEN : 月曜～土曜 10 : 30～18 : 30

電話 : 03-5841-1039

http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp

シンポジウム・講演会

シンポジウム・講演会

環境安全研究センター

第16回環境安全研究センターシンポジウム
「我々を取り巻く大気環境と保全」

趣旨：

環境安全研究センターでは毎年、環境安全研究センターシンポジウムを開催しております。このシンポジウムは主に一般の方々を対象に環境と安全のことにに関して、東京大学内の研究者から研究紹介、事例紹介をしてもらうことを目的としています。今年は「我々を取り巻く大気環境と保全」をテーマとしております。

シンポジウム内容：

近年の目覚ましい発展とともに自然環境の汚染がすすみ、さまざまな大気環境問題が引き起こされています。その形態は、室内におけるシックハウスの問題、都市部を中心とした光化学スモッグの問題や、地球温暖化、オゾン層破壊といったような地球規模の問題とさまざまにあります。これらは、人間への健康影響、動植物における生態系への影響、気候の変動影響といった我々の生活を脅かす問題を引き起こします。我々が抱えている大気環境問題は、人類の持続的な発展のためには解決していかなければならない重大な課題のひとつであり、その問題解決には、各分野の専門家の連携が必要不可欠であります。

本シンポジウムでは、さまざまな大気環境問題に取り組んでいる本学5名の専門家が現在の大気環境と保全をテーマに研究発表をします。本シンポジウムを通じて、大気環境の現状と問題の理解を深め、今後の問題解決についての礎としたいと思います。

開催日時： 12月26日（火） 13:15～17:55

場 所： 安田講堂

プログラム：

第1部 13:15～15:20

開会挨拶 山本 和夫（環境安全研究センター長）

総長講演 小宮山 宏（東京大学総長）

「空間サイズ別空気環境問題」

ー作業環境から地球環境までー

柳沢 幸雄（新領域創成科学研究科 教授）

「増加するアジアの地表オゾンが植物に及ぼす影響」

小林 和彦（農学生命科学研究科 教授）

第2部 15:40～17:55

「地球温暖化物質を宇宙から監視する」

今須 良一（気候システム研究センター 助教授）

「屋内の空気環境と健康」

ータバコの煙の管理を例にー

大久保 靖司（保健センター 助教授）

「大気環境を支配する化学反応」

戸野倉 賢一（環境安全研究センター 助教授）

参加費： 無料

問い合わせ先：環境安全研究センター

センターシンポジウム係

電話：03-5841-2972

E-mail:sympo@esc.u-tokyo.ac.jp

シンポジウム・講演会

大学院工学系研究科・工学部

2006レーザーアライアンス シンポジウム

工学系研究科では、レーザーを用いた極限環境における基礎研究からレーザーを用いた新材料・新規デバイスの開発まで、「レーザー」をキーワードに幅広い専門の研究グループが共同して「レーザーアライアンス」を組織し、共同研究を行っています。毎年恒例になったシンポジウムを、12月26日に行います。今回は、アライアンスメンバーの発表のみならず、理学系研究科との連携も視野に入れて、基礎から応用に到る幅広い分野から第一線の講演者を集めました。年末の忙しい時期ですが、レーザーを核にした幅広い研究に接してアイデアを広げる格好の機会ですので、奮ってご参加ください。

日時：12月26日（火）

場所：工学部2号館大講堂

時間：13:30～18:00

プログラム

13:30

開会挨拶：工学系研究科長 松本 洋一郎

委員長挨拶：工学系研究科物理工学専攻 五神 真

13:40 特別講演（各40分、質疑5分、合計45分）

理学系研究科化学専攻 山内 薫

「強光子場科学のフロンティア」

工学系研究科応用化学専攻 平尾 公彦

「理論化学ー現状と将来の可能性」

休憩 20分

15:30 講演（各25分、質疑5分、合計30分）

工学系研究科システム量子工学専攻 石川 顕一

「高強度超短パルスレーザーパルス中の原子ダイナ

ミクスのシミュレーション」

理学系研究科物理学専攻 島野 亮

「THz時間領域分光法-固体分光の視点から」

量子相エレクトロニクス研究センター 染谷 隆夫

「大面積エレクトロニクス」

先端科学技術研究センター 中野 義昭

「全光ネットワーク実現に向けた半導体光デバイス
開発」

17:30

開会挨拶：工学系研究科化学システム工学専攻 越 光男

終了後、懇親会

問い合わせ先：

杉山正和 sugiyama@ee.t.u-tokyo.ac.jp

中村美雄 yoshio@sogo.t.u-tokyo.ac.jp

電話 03-5841-7673

シンポジウム「第2回アジア古籍保全講演会」

東洋文化研究所では、昨年度に引き続き古籍の保存に関する講演会を開催します。今年は漢籍の本場中国国家図書館の資料保全の状況や資料の宿敵カビの対応法についてお話をうかがいます。また、学内での資料保存の取り組みについてもご紹介します。

開催日：2007年1月23日（火）

場 所：工学部2号館大講堂（213号室）

内 容：

10:30～10:40 開会挨拶

関本 照夫（東洋文化研究所長）

10:40～12:00 事例報告

東洋文化研究所所蔵漢籍・中国書の劣化調査と補修
木部 徹（有限会社資料保存器材）

アジア近現代資料の保存と利用

－東京大学経済学部資料室の取り組み
小島 浩之（経済学部図書館資料室助手）

13:30～16:30 講演

中国古籍の保全と修復

周 崇潤（中国国家図書館善本部図書保護係長）
通訳：橋本 秀美（北京大学歴史系副教授）

書籍・資料のカビとその対策

木川 りか
（東京文化財研究所保存科学部主任研究官）

16:45～17:15 総合討論

申込：

氏名・所属を明記し、東洋文化研究所図書室宛（lib-info@ioc.u-tokyo.ac.jp）に、2007年1月19日（金）必着でお申し込みください。

詳細についてはホームページをご覧ください。

<http://institute.ioc.u-tokyo.ac.jp/library/>

公開シンポジウム

「ボーダレス化時代における法システムの融解と再構築－現場との対話」

日程：2007年1月27日（土）、28日（日）

場所：六本木アカデミーヒルズ49 オーディトリウム
（<http://www.academyhills.com/information/map/>）

参加料は無料です。

参加登録は下記の問い合わせ先にご連絡下さい。
多くの皆様のご参加をお待ちしております。

第1部 27日（土）9:30～

「国家と社会関係をめぐる法システムの再編成」

イントロダクション：

ボーダレス化時代における法システムの課題
渡辺浩（東京大学教授）

第1部 国家と社会関係をめぐる法システムの再編成

（1）研究チームからの論点提示

法形成・実施における団体の役割

江頭憲治郎（東京大学教授）

国家社会関係の変容と税制の再編成

増井良啓（東京大学教授）

社会保障における国家と市場

岩村正彦（東京大学教授）

国家任務遂行における公私の融合

碓井光明（東京大学教授）

（2）現場からの応答（実務法曹関係者・行政関係者）

柴崎澄哉（東京大学公共政策大学院教授）

未定（地方公共団体関係者）

（3）総合討論

※第1部の講演者は変更になる場合があります。

第2部 27日（土）14:00～

「国際関係をめぐる法システムの再編成」

（1）研究チームからの論点提示

国際法における「境界」 中谷和弘（東京大学教授）

国家の解体・統合と国籍・市民権問題

塩川伸明（東京大学教授）

不法行為法から見た在日外国人

大村敦志（東京大学教授）

リベラル・デモクラシーの行方－レオ・シュトラウスの

政治思想によせて 長谷部恭男（東京大学教授）

(2) 実務の観点からの応答

パレスチナ問題と国際法 茂田宏 (元イスラエル大使)
東アジア諸国との経済連携協定の構築とその地域統合促進への基盤形成効果

宮川眞喜雄 (日本国際問題研究所所長)

(3) 総合討論

第3部 28日(日) 9:30~

「科学技術発展と法システムの再編成」

(1) 研究チームからの論点提示

科学技術発展と法の課題—歴史的視座から

西川洋一 (東京大学教授)

科学技術発展と刑事法 高山佳奈子 (京都大学教授)

知識創造と法システム 山本隆司 (東京大学教授)

科学技術と法システムの組織的基盤

城山英明 (東京大学教授)

(2) 現場からの応答

米本昌平 (科学技術弁明研究所所長)

中尾政之 (東京大学大学院 工学系研究科教授)

大島啓太郎 (国土交通省国土交通政策研究所副所長)

中村幸一郎 (経済産業省原子力・安全保安院

原子力安全技術基盤課長)

(3) 総合討論

申込方法:

①お名前 (ふりがな)、②勤務先、学校名、③ご連絡先メールアドレスまたはFAX番号、④どの部 (第1部~第3部) の参加を希望するか (※)、を明記のうえ、

大学院法学政治学研究科学術創成プロジェクト事務局宛にメール (legalsys@j.u-tokyo.ac.jp) またはFAX (03-5841-3174・法学部研究室受付) でお申し込みください。定員 (150名) に達し次第、締め切らせていただきます。

※興味のある回のみ参加、全3部連続参加、いずれでも可能です。

問い合わせ先:

法学部 学術創成プロジェクト「ボーダレス化時代における法システムの再構築」プロジェクト事務局 吉田

E-mail: legalsys@j.u-tokyo.ac.jp

http://www.j.u-tokyo.ac.jp/legalsys/index.htm

『平成18年度 科学研究費補助金研究成果公開促進費補助事業』

お知らせ

お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

「教養学部報」第498 (12月6日) 号の発行 ——教員による、学生のための学内新聞——

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学際交流棟ロビー、図書館ロビー、生協書籍部、保健センター駒場支所で無料配布しています。バックナンバーもあります。

第498 (12月6日) 号の内容は以下のとおりとなっていますので、ぜひご覧ください。

遠藤泰樹: 化学? の未解決問題——ぼけた星間線の謎

三谷 博: 京論壇——東大生と北京大学生の共同研究

鍛冶哲郎: 「初修外国語」で学ぶこと

松浦寿輝: フラ語とる馬鹿

谷田貝悦男: 第2回駒場キャンパス技術発表会開催される

江里口良治: 2006年度ノーベル物理学賞について

渡邊雄一郎: 2006年ノーベル医学生理学賞対象となったRNA干渉とは

保健センター: 東京大学における新型インフルエンザへの注意喚起

錦織紳一: 〈私のいち押し〉ブルーノート決定盤1500シリーズ

中西隆造: 〈時に沿って〉駒場時代

お知らせ

総務部

山上会館・山上会館龍岡門別館の年末年始の休館について

山上会館・山上会館龍岡門別館では、下記のとおり休館とさせていただきます。

記

休館日: 12月28日 (木) ~ 1月3日 (水)

お知らせ

学生部

年末年始の体育施設の使用及び受付について

運動会窓口受付業務は12月28日（木）から1月4日（木）まで休止します。
これに伴い、体育施設の使用及び受付は下表のとおり行います。

体育施設名	使用休止期間	予 約 受 付	
		対象期間	受付開始日
二食横/農学部 テニスコート ※1	12月28日（木） ～1月4日（木）	1月11日（木） ～1月14日（日）	1月5日（金）
農学部グラウンド		2月分	1月9日（火）
検見川総合運動場	12月28日（木） ～1月4日（木）		学内者 12月19日（火） 学外者 1月5日（金）
保健体育寮	12月27日（水） ～1月4日（木）		1月5日（金）～
二食地下プール	12月23日（土） ～1月4日（木）		
御殿下記念館 ※2	12月28日（木） ～1月4日（木）		運動部・Aクラブ優先予約 12月1日（金） Bクラブ第1順予約 1月1日（月） フリー予約 1月6日（土）
御殿下グラウンド ※3			※4

※1 1月5日（金）～1月10日（水）分の予約日は12月21日（木）となります。

※2 12月27日（水）は館内清掃を行うため、15時に閉館となります。

※3 年末年始の鍵の貸し借りは警備室で行います。なお、同期間は専有予約以外の方の利用はできません。

※4 御殿下記念館・グラウンドの予約はオンラインのみです。

問い合わせ先：学生部学生課体育チーム（内線22509～22511）

お知らせ

東洋文化研究所

閲覧サービス停止のお知らせ

2006年4月より、医学部1号館に臨時閲覧室を開き、予約制による閲覧サービスを行っていましたが、研究所建物の改修工事のため、2007年1月から閲覧に関する業務を停止いたします。

併せてILLの受付業務も停止いたします

利用者の皆様には重ねて多大なご迷惑をおかけすることになりますが、ご了承くださいますようお願いいたします。

年内閲覧期間：2006年12月21日まで

閲覧停止期間：2007年1月4日から2008年3月予定
(工事完了まで)

なお、最新の状況は本研究所図書室ホームページにてお知らせいたします。

問い合わせ先

メール： library@ioc.u-tokyo.ac.jp

電話： 03-5841-5893 (図書室カウンター)

お知らせ

学生部

平成19年度入試に伴う臨時措置 (本郷キャンパス) について

I 平成19年度大学入試センター試験及び第2次学力試験(前期日程)の実施に伴う入構制限等の臨時措置(本郷関係)について

平成19年度の大学入試センター試験(平成19年1月20日(土)・21日(日))及び第2次学力試験 前期日程(平成19年2月25日(日)・26日(月)・27日(火))の実施のため、次のとおり入構制限等の臨時措置をとることとする。ただし、2月27日(火)は、法文1・2号館及び山上会館の建物について、入館制限等の臨時措置をとることとする。

1. 授業の休止

(1) 大学入試センター試験

平成19年1月19日(金)・・・試験場準備のため、試験に使用する教室について、原則として午後の授業は休止する。

(2) 第2次学力試験(前期日程)

平成19年2月23日(金)・・・試験場準備のため、試験に使用する教室について、原則として午後の授業は休止する。

平成19年2月26日(月)・・・試験当日のため、授業は休止する。

2. 試験場区域

試験場区域を次のとおり設定する。

- (1) 本郷区域(本郷地区から本部棟・附属病院・第二食堂建物・環境安全研究センターを除く区域)
- (2) 農学部区域(弥生地区から地震研究所・農学部グラウンド・野球場を除く区域)
- (3) ただし、大学入試センター試験にあつては、「(1)本郷区域」のみとし、(1)及び(2)の区域に通じる陸橋は封鎖する。

3. 入構制限等

(1) 入構許可

試験当日は、「受験者」、「本学教職員」、「研究のために特に入構を必要とする本学学生・研究生」及び「特に入構を許可された者」は入構できるが、その他の者の試験場区域への入構は禁止する。

なお、入・出構の際は、警備担当者の指示に従うこと。

また、試験場区域においては、試験の妨げにならないよう静粛にすること。

(2) 「身分証明書」の提示

入構に際しては、次のとおり「身分証明書等」を提示するものとする。

- ① 「本学教職員」・・・「身分証明書」
※ 「入試実施本部関係教職員」は、「入試統一腕章」を着用する。
- ② 「研究のために特に入構を必要とする本学学生・研究生」・・・「学生証・研究生証」
- ③ 「特に入構を許可された者」・・・「入試特別入構証」
※ 「入試特別入構証」は、大学入試センター試験用及び第2次学力試験(前期日程)用の2種類とする。

4. 試験場区域への入・出構は、次によるものとする。

(1) 本郷区域

① 「本学教職員」、「研究のために特に入構を必要とする本学学生・研究生」及び「特に入構を許可された者」正門、赤門、弥生門及び薬学部角・理学部1号館と化学館裏の間・第二食堂前ゲート

②「受験者」

正門、弥生門及び薬学部角・理学部1号館と化学館裏の間・第二食堂前ゲート

ただし、大学入試センター試験にあつては、第二食堂前ゲートは使用できない。

なお、赤門からの入構は、正門の混雑時及び雨天・降雪時に限り中央実施本部の判断により行う。

(2) 農学部区域

①「本学教職員」、「研究のために特に入構を必要とする本学学生・研究生」及び「特に入構を許可された者」

農正門及び南門

②「受験者」

農正門

(3) 上記の各門及びゲート以外からの立ち入りを禁止する。

なお、龍岡門及び池之端門は平常通りとする。

備 考

1. 報道関係者等

「報道関係者等」は、腕章による識別ではなく、広報委員長の発行する「入試特別入構証」により入構を認める。

なお、報道関係者等への対応は広報委員会を通じて行う。

2. その他

(1) 試験場区域への車両による入・出構は、原則として認めないが、やむを得ない事由のある者の入・出構は、薬学部角ゲート・第二食堂前ゲート及び弥生門・農正門とする。

但し、オートバイについては、エンジンを切った場合のみ入・出構を認める。

(2) 附属病院の業務は平常通りとなっており、附属病院の業務に関連して、試験場区域に入構する必要がある場合には、「教職員」については「身分証明書」、「学生・研究生」については「学生証・研究生証」、「その他の者」については「入試特別入構証」を必ず提示すること。

Ⅱ 平成19年度第2次学力試験（後期日程）の実施に伴う入館制限等の臨時措置（本郷構内）について

第2次学力試験 後期日程（平成19年3月13日（火）・14日（水））の実施のため、次のとおり入館制限等の臨時措置をとることとする。

1. 授業の休止

第2次学力試験（後期日程）

平成19年3月12日（月）…試験場準備のため、試験に使用する教室について、原則として午後の授業は休

止する。

平成19年3月13日（火）

平成19年3月14日（水）

…試験当日のため、授業は休止する。

2. 試験場

法文1・2号館、経済学部（経済学研究科棟）、工学部5・8・14号館及び山上会館

3. 入館制限等

試験当日は、試験場を設定した当該建物への「受験者」及び「入試関係教職員」以外の立ち入りは原則として禁止する。

4. 試験場への入館

「受験者」及び「入試関係教職員」の出入口については、各建物の指定された場所とする。

備 考

1. 報道関係者

報道関係者の入館及び構内での取材については、広報委員会を通じて行う。

Ⅲ 平成19年度第2次学力試験合格発表（前期日程）の実施に伴う車両通行規制の臨時措置（本郷関係）について

平成19年度の第2次学力試験 前期日程合格発表（平成19年3月10日（土））の際、受験者等の安全確保のため、次のとおり通行規制の臨時措置をとることとする。

1. 規制区域

医学部本館前ロータリー～赤門～正門

2. 規制時間

11:00～15:00

3. 規制車両

自動車及びオートバイ（合格発表関係車両を除く）

4. 注意事項

上記2の規制時間帯以外でも、車両での通行の際は、受験者等の安全確保を第一に考え、通行すること。

お知らせ

学生部

平成19年度入試に伴う臨時措置 (駒場関係) について

平成19年度の大学入試センター試験（平成19年1月20日(土)・21日(日)）及び第2次学力試験前期日程（平成19年2月25日(日)・26日(月)）の実施のため、次のとおり入構制限等の臨時措置をとることとする。

1. 授業の休止

(1) 大学入試センター試験関係

平成19年1月19日(金)・・・試験場準備のため、原則として午後の授業は休止する。

(2) 第2次学力試験（前期日程）関係

駒場キャンパスにおける授業ならびに学期末試験は終了しているので、この措置はとらない。

2. 試験場区域

試験場区域を下図のとおり設定する。入試当日は黄・黒のロープによって、その境界を明示する。

3. 入構制限等

(1) 入構許可

試験当日は、「受験者」、「本学教職員」、「研究のために特に入構を必要とする本学学生・研究生」及び「特に入構を許可された者」は試験場区域へ入構できるが、その他の者の入構は禁止する。

なお、試験場区域においては、試験の妨げにならない

いよう静粛にすること。

(2) 「身分証明書」の提示

入構に際しては、次のとおり「身分証明書等」を提示するものとする。

- ①「本学教職員」・・・「身分証明書」
- ②「研究のために特に入構を必要とする本学学生・研究生」・・・「学生証・研究生証」
- ③「特に入構を許可された者」・・・「入試特別入構証」

(3) 受験生の入・退構は、大学入試センター試験及び第2次学力試験（前期日程）とも、正門のみとする。

(4) 入試当日、北門（野球場門）・西門は閉鎖する。裏門・炊事門・梅林門・坂下門横は閉鎖しないが、学部関係者以外の者の通行を禁止する。

備考

1. 報道関係者等

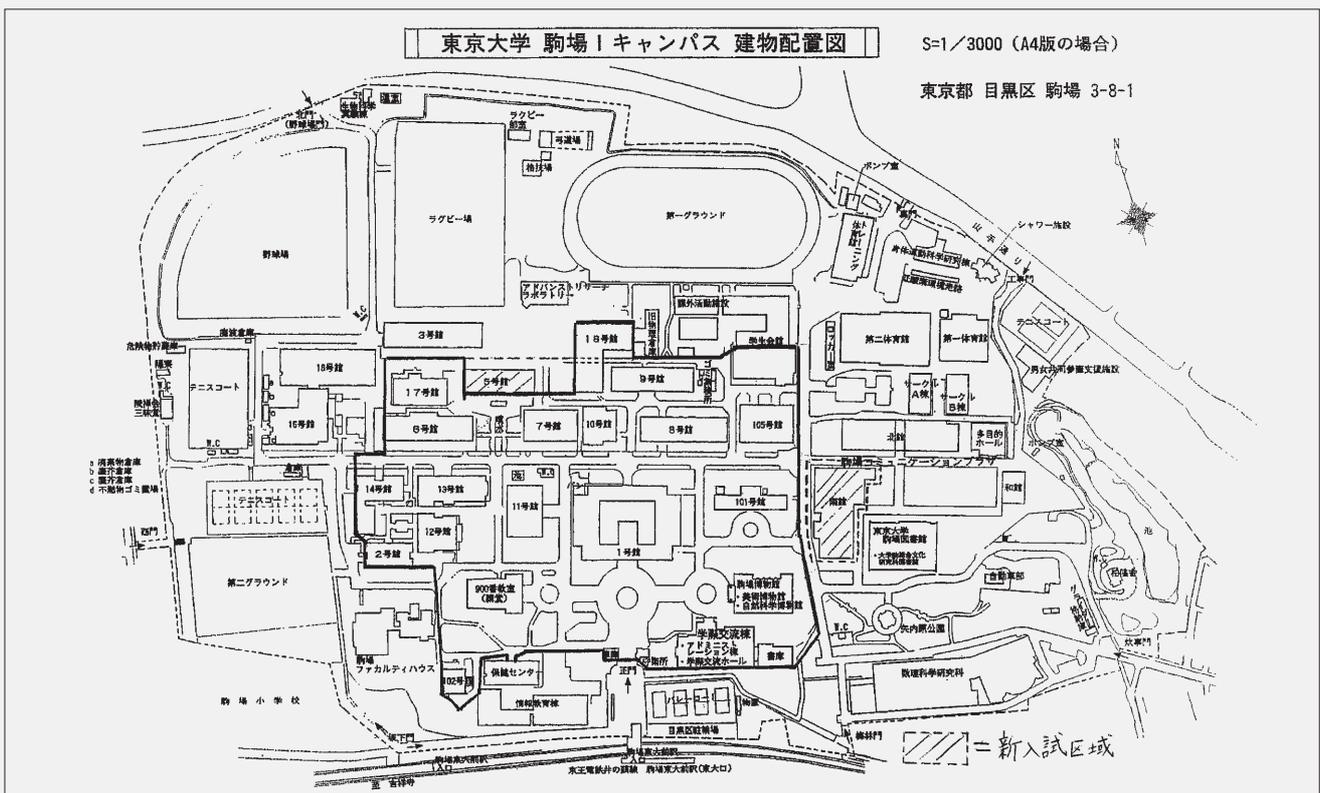
報道関係者等は、腕章による識別ではなく、本学広報委員会の発行する「入試特別入構証」を所持する者のみ入構を認める（報道関係者の取り扱いは、本学広報委員会を通じて行う。）。

2. 「入試特別入構証」の発行

「入試特別入構証」の発行手続きは、総務課総務係で行う（報道関係者を除く。）。

3. その他

入試当日、車輛の入構は原則として禁止する。



特集の記事を 執筆してみませんか？

学内広報では巻頭特集の記事テーマとその執筆部署を募集しています。学内への周知を図るためのツールとして特集はとても効果的です。皆さんの部署でも、ぜひ特集の記事を執筆してみませんか？

1. 制作方法

- ① テーマの選定
全学の教職員を読者対象とするテーマを選定することになっています。まずは一度、総務部広報課に気軽にご相談ください。特集に馴染まないテーマでない限り、対応します。
- ② 内容・構成の決定
テーマが決まったら執筆部署と学内広報編集スタッフ（以下、編集スタッフ）が打ち合わせをしてページの内容を決めていきます。見開き2ページをひとつの単位とします。内容が盛りだくさんの場合は4ページ、または6ページで構成することもあります。
- ③ 原稿の執筆
決定した構成に合わせて執筆部署に原稿を書いていただきます。字数等は編集スタッフが提示します。原稿はwordファイルでご制作下さい。
- ④ ビジュアル要素の提供
特集に盛り込む写真・図・イラストを執筆部署から提供していただきます。手持ちの写真がない場合は編集スタッフが撮影にうかがいます。
- ⑤ デザイン
お書きいただいた原稿、ご提供いただいた写真・図等を素材にして、編集スタッフがページデザインを作ります。もちろん、執筆部署でデザインを作っていたいただいてもかまいません。
- ⑥ 校正
デザインしたページイメージをお送りしますので、主に文字校正を行なっていただきます。
- ⑦ 完成
刷り上がった学内広報は、執筆部署に多めに配布します。

2. 締切日

こちらから期日を申しますので、ご協力をお願いします。通常の学内広報の切日（第1・第3水曜日）の2日前を原稿締切日とします。

3. 問い合わせ先・原稿提出先

総務部広報課 広報企画チーム
TEL：03-3811-3393 内線22031
E-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

ニュースページ、 インフォメーションページ への記事提出要領

「学内広報」は皆さんから送っていただく記事で作られています。下記の提出要領により、積極的に学内の情報をお寄せください。

1. 提出方法

記事は、各部署の広報担当者を通して、メールの添付ファイルとしてデータで送付すること。

2. 締切日

原則として毎月第1・3水曜日を原稿の締切日とする（配布は翌々週の火曜日）。ただし祝日等により変更となる場合があるため、HPで発行スケジュールを確認すること。

3. 提出の際の留意事項

(1) 文字数

文字数は記事1件につき800字を目安とし、内容により増減は可とする。

(2) 写真

- ① 写真を掲載する場合はキャプション（説明文）を25文字以内で添えること。
- ② 写真を電子データで提出する場合、Wordファイルなどに貼り付けず、jpeg等の形式による元の画像ファイルを送付すること。
- ③ 写真は電子データがない場合、プリントのものも掲載可とする。

(3) 書式

- ① 原稿は1行25文字の書式で作成すること（ただし、大きな図表などが含まれる場合は、この限りではない）。
- ② 原稿のはじめに担当部署名と記事タイトルを記載すること。
- ③ 記事タイトルは極力簡潔でわかりやすいものとする。

(4) 文章表現のきまり

- ① 句読点は「、」「。」を用いること（「，」「.」は用いない）。
- ② 時間は24時間表記とし、日付には括弧書きで曜日をつけること。
- ③ この他、特に表記する必要のない「平成●年」は削除する、特に支障がない限り「東京大学」は「本学」とする等、表記統一のための修正を編集段階で行う。

※編集スケジュールの都合上、原則として校正はできません。基本的にはいただいた原稿がそのまま掲載されますので、内容に間違いのないよう、十分ご注意ください。

4. 問い合わせ先・提出先

総務部広報課広報企画チーム
TEL：03-3811-3393 内線22031
E-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

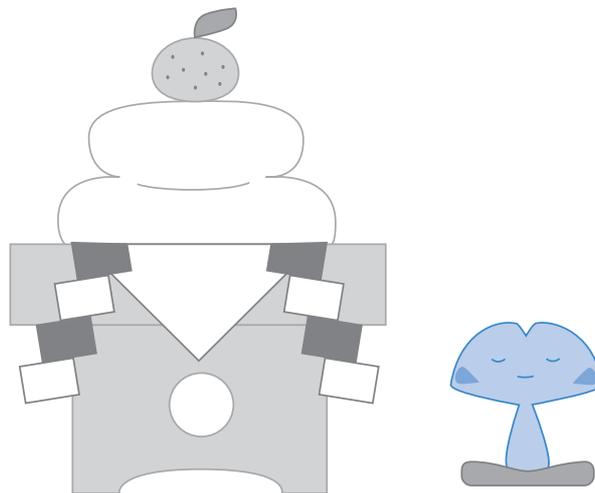
人事異動（教員）

発令日、部局、職、氏名(五十音)順

発令年月日	氏名	異動内容	旧（現）職等
（採 用）			
18.12.1	田畑 仁	大学院工学系研究科教授	大阪大学産業科学研究所附属産業科学ナノテクノロジーセンター教授
18.12.1	安藤 光義	大学院農学生命科学研究科助教授	茨城大学農学部助教授
（昇 任）			
18.11.16	森川 博之	大学院工学系研究科教授	大学院新領域創成科学研究科助教授
18.11.16	金久 博昭	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科助教授
18.11.16	丹野 義彦	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科助教授
18.11.16	豊島 陽子	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科助教授
18.11.16	渡邊雄一郎	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科助教授
18.11.16	木村 伸吾	大学院新領域創成科学研究科教授	大学院新領域創成科学研究科助教授
18.11.16	野口 祐二	先端科学技術研究センター助教授	先端科学技術研究センター講師
18.11.16	矢入 健久	先端科学技術研究センター助教授	先端科学技術研究センター講師
18.12.1	西秋 良宏	総合研究博物館教授	総合研究博物館助教授
18.12.1	粕谷 誠	大学院経済学研究科教授	大学院経済学研究科助教授
18.12.1	酒井 慎一	地震研究所附属地震地殻変動観測センター助教授	地震研究所附属地震地殻変動観測センター助手
18.12.1	松田 巖	物性研究所附属軌道放射物性研究施設助教授	大学院理学系研究科助手

※ 退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。

東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。



学内広報キャラクター いちょうくん

EVENT LIST

行事名	日時	場所	連絡先・HP等
第6回 Disease Biology Excellent Lecture Series “マウスミュータジェネシスプロジェクトと遺伝性難病モデル”	12月22日(金) 12:00~	医学部附属病院 中央診療棟(11期) 7階大会議室	疾患生命工学センター分子病態医科学 E-mail:tm@m.u-tokyo.ac.jp URL: http://www.cdbim.m.u-tokyo.ac.jp/
ビッグバン宇宙国際研究センター公開講演会 宇宙最大のなぞ：ダークエネルギー	12月22日(金) 18:00~	理学部1号館2階小柴ホール	大学院理学系研究科附属ビッグバン宇宙国際研究センター E-mail:toiawase@resceu.s.u-tokyo.ac.jp URL: http://www.resceu.s.u-tokyo.ac.jp/WelcomerJ.htm Fax: 03-5841-763
第34回生研公開講座イブニングセミナー 「環境のための物質・材料工学最前線」 第10回「サステナビリティのためのエレクトロニクス」	12月22日(金) 18:00~	生産技術研究所 (駒場リサーチキャンパス)	生産技術研究所 総務・広報チーム TEL: 03(5452)6863、6866 FAX: 03(5452)6071 URL: http://www.iis.u-tokyo.ac.jp/announce/
第16回環境安全研究センターシンポジウム テーマ：「我々を取り巻く大気環境と保全」 ※32ページ参照	12月26日(火) 13:15~	安田講堂	環境安全研究センターシンポジウム係 E-mail: sympo@esc.u-tokyo.ac.jp TEL: 03-5841-2972 FAX: 03-5841-1233 URL: http://www.esc.u-tokyo.ac.jp/etc/sympoH18.html
学術講演会「工学が拓く生命科学の新たな地平」	平成19年1月10日(水) 13:00~	生産技術研究所 (駒場IIリサーチキャンパス) 総合研究実験棟(An棟) 2階コンベンションホール	生産技術研究所 総務課総務・広報チーム TEL: 03-5452-6863、6866 FAX: 03-5452-6071 E-mail: koho@iis.u-tokyo.ac.jp URL: http://www.iis.u-tokyo.ac.jp
第2回シンポジウム 「学際領域における評価のデザイン： RCTとシステムティック・レビューの現状」	平成19年1月12日(金) 13:00~	薬学系研究科 総合研究棟2F講堂	大学院薬学系研究科医薬政策学講座 TEL: 03-5841-4828 FAX: 03-5841-4829 E-mail: takasaki@mol.f.u-tokyo.ac.jp URL: http://www.f.u-tokyo.ac.jp/utdpm/event/rct.html
21世紀COEシンポジウム 「豊かな社会を築くセキュアライフ・エレクトロニクス」	平成19年1月15日(月) 16日(火)	工学部2号館1階213大講堂	東京大学電気系COE支援オフィス TEL: 03-5841-6793 E-mail: coe21@ee.t.u-tokyo.ac.jp URL: http://www.ee.t.u-tokyo.ac.jp/coe/conf07.html
産学連携フォーラム2007	平成19年1月22日(月) 13:00~	駒場リサーチキャンパス 総合研究実験棟(An棟)2階	生産技術研究所内 (財)生産技術研究奨励会 産学連携フォーラム係 FAX: 03-5452-6096 E-mail: fpistol1@iis.u-tokyo.ac.jp
東洋文化研究所シンポジウム 「第2回アジア古籍保全講演会」	平成19年1月23日(火) 10:30~	工学部2号館大講堂(213号室)	東洋文化研究所図書室 E-mail: lib-info@ioc.u-tokyo.ac.jp URL: http://institute.ioc.u-tokyo.ac.jp/library/
東京大学法学部連続講演会「高齢化社会と法」 第8回「高齢社会の中の少子化対策」 講師：増田雅暢(内閣府参事官)	平成19年1月27日(土) 13:30~	法学政治学系総合教育棟 (通称：法科大学院ガラス棟) 101教室	大学院法学政治学系研究科附属ビジネスロー・比較法政研究センター E-mail: icclpbcl@j.u-tokyo.ac.jp FAX: 03-5805-7143 URL: http://www.j.u-tokyo.ac.jp/%7ebcl/
大学院法学政治学系研究科公開シンポジウム 「ボーダレス化時代における法システムの融解と再構築—現場との対話」 ※34ページ参照	平成19年1月27日(土) 28日(日) 9:30~	六本木アカデミーヒルズ49 オーディトリウム	法学部 学術創成プロジェクト 「ボーダレス化時代における法システムの再構築」 プロジェクト事務局 吉田 E-mail: legalsys@j.u-tokyo.ac.jp URL: http://www.j.u-tokyo.ac.jp/legalsys/index.htm
行事名	開催期間	場所	連絡先・HP等
特別展示『東京大学コレクション —写真家上田義彦のマネリスム博物誌』展	11月3日(金・祝) ~平成19年1月28日 (日) (休館日もありますので ご確認ください)	総合研究博物館	総合研究博物館 ハローダイヤル: 03-5777-8600 URL: http://www.um.u-tokyo.ac.jp
第9回東京大学ドイツ文化・社会研修プログラム	平成19年3月7日頃 ~25日頃 (変更の可能性あり)	ミュンヘン、ベルリン	教養学部ドイツ語部会(18号館1116室) 幸田薫教授 E-mail: koda@boz.c.u-tokyo.ac.jp TEL: 03-5454-6346

◆ 表紙写真 ◆

夕暮れ時の農学生命科学研究科附属牧場
(14ページに関連記事)

編集後記

学内広報も次号でリニューアル満1年を迎えます。思えばこのメディアは、1年の間に連載も増え、特集も毎号掲載されるまでに成長しました。純粋なニュース媒体に雑誌的なテイストを加えていくという試みが、ある程度、実を結びつつあるのではないのでしょうか？メディアが変貌していくことは時代の要請だとも思えます。賛否両論あるかとは思いますが、変わりゆく学内広報を今後も暖かい目でお見守りください。(し)

Contents

特集

- 02 「知の還元」の実現に向けて—研究成果の社会還元を促す「大学発ベンチャー」の作り方—

NEWS

一般ニュース

- 5 学生部
平成18年度（後期）東京大学学術研究活動等奨励事業（国外）の採択決まる
- 5 バリアフリー支援室
経済学部学生が施設部保全課環境整備チームの清掃実習に参加
- 6 学生部
“キャリアキックオフセミナー”開催される
- 6 地球観測データ統融合連携研究機構
EDITORIA始動—国家基幹技術「データ統合・解析システム」キックオフ会議開催される—
- 7 学生部
第53回総長杯争奪水上運動会開催される
- 8 施設部
世田谷区障害者雇用促進協議会から東京大学へ感謝状が贈呈される
- 9 人事部
東京大学教職員永年勤続者表彰式行われる
- 10 研究協力部
東京大学生命科学研究ネットワーク・シンポジウム—東京大学生命科学の未来を拓く—
- 11 環境安全本部
喫煙対策ワーキンググループ（WG）の発足と「喫煙意見箱」の設置
- 12 学生部
入試事務室の設置
- 12 学生部
平成19年度大学入試センター試験の本学割当数決まる

部局ニュース

- 12 大学院薬学系研究科・薬学部
留学生見学旅行「上州・軽井沢 だるまの旅」
- 13 大学院法学政治学研究科・法学部
平成19（2007）年度大学院法学政治学研究科修士課程入学試験について
- 14 大学院農学生命科学研究科・農学部
附属牧場では牧場公開デーなど秋の行事が盛り沢山
- 15 大学院工学系研究科・工学部
工学部2号館でバリアフリー実験を実施
- 15 史料編纂所
第三回東アジア史料研究編纂機関国際学術会議開催される
- 16 生産技術研究所
「ITS実験用交通信号機」点灯式が行われる
- 16 総合研究博物館
平成18年度「学芸員専修コース」の終了
- 17 大学院薬学系研究科・薬学部
21世紀COEプログラム「戦略的基礎創薬科学」第4回COE国際シンポジウム
900人の参加を得て盛会に終了！
- 18 生産技術研究所
「高知ITSセミナー～東京大学ITSセミナーシリーズ①～」開催される
- 18 大学院総合文化研究科・教養学部
留学生見学旅行を実施
- 19 東洋文化研究所
第6回東洋文化研究所公開講座「アジアを知らば世界が見える—アジアの暦」
- 20 大学院教育学研究科・教育学部
図書館団地総合防災訓練開催される（主催：大学院教育学研究科・教育学部）
- 20 大学院人文社会系研究科・文学部
外国人留学生見学旅行を実施

- 21 地震研究所
第15回一般公開・公開講義を開催
- 22 史料編纂所
中藤靖之技術職員が文化庁長官表彰を受ける
- 23 大学院農学生命科学研究科・農学部
動物慰霊祭
- 23 大学院教育学研究科・教育学部
教育学部附属中等教育学校で濱田純一副学長の特別授業が行われる
- 23 海洋研究所
ジャズコンサート開催
- 25 学生部
平成18年11月1日現在学生数—学部学生14,387人、大学院学生13,456人、研究生等828人—

コラム

- 24 噴水 教育学部附属中等教育学校の生徒が税の作文で各賞受賞！
- 27 バリアフリーの現場から 第2回
- 28 さすてなTimes Vol.7
- 28 調達本部です 第20回
- 29 Crossroad～産学連携本部だより～Vol.8
- 30 Flags運動部紹介 No.26
- 31 龍岡門横丁噺 第9回
- 31 Relay Column「ワタシのオシゴト」 第5回
- 32 コミュニケーションセンターだより No.27

INFORMATION

シンポジウム

- 32 環境安全研究センター
第16回環境安全研究センターシンポジウム「我々を取り巻く大気環境と保全」
- 33 大学院工学系研究科・工学部
2006レーザーアライアンス シンポジウム
- 34 東洋文化研究所
シンポジウム「第2回アジア古籍保全講演会」
- 34 大学院法学政治学研究科・法学部
公開シンポジウム「ボータレス化時代における法システムの融解と再構築—現場との対話」

お知らせ

- 35 大学院総合文化研究科・教養学部
「教養学部報」第498（12月6日）号の発行—教員による、学生のための学内新聞—
- 35 総務部
山上会館・山上会館龍岡門別館の年末年始の休館について
- 36 学生部
年末年始の体育施設の使用及び受付について
- 37 東洋文化研究所
閲覧サービス停止のお知らせ
- 37 学生部
平成19年度入試に伴う臨時措置（本郷キャンパス）について
- 39 学生部
平成19年度入試に伴う臨時措置（駒場関係）について

41 人事異動

40 EVENT LIST

淡青評論

- 44 先端研と駒場の「政治学を読み破る」ゼミ



七徳堂鬼瓦

先端研と駒場の「政治学を読み破る」ゼミ

大学に入りたての駒場の一、二年生むけのゼミを始めてちょうど三年。「政治学を読み破る」がテーマである。毎週一冊広く政治学に関する本を読み、A4一枚のペーパーを書き、研究室にメールで送る。ゼミでは全員のペーパーが手渡され全員がディスカッションの輪に入る。ひたすらこれをくり返す単純なやり方だが、学生評価では「大鬼」が定評となる。

集う学生は毎学期十五名前後で規模としては適当なところ。文科各系と理科一類の学生が交わるので、あたかも異学部交流的となって教師の側も面白い。古典・準古典・新刊からアトランダムに選び、今のところ重複は

ない。時には映画を見に行かせ、時には「書評演習」を加えて、新聞の書評デスクに来てもらって批評を仰いだり、時には「ブック・トリップ」と称する本屋めぐりを行ない、春秋二回は合宿で班別対抗の「読み破り」で覇を競う。コンパはしばしばのこと。

今春初めて卒業生が出た。駒場のゼミだから、三、四年生はOB・OG扱いだが、彼等もちょうくちよくゼミや研究室に顔を出すから横の広がりと同じく縦のつながりもしっかりと太い幹となった。毎週末曜夕方の方先端研十三号館は、若い学生の出入りでひときわにぎわっている。

ゼミOBの一人が名づけた「駒場の秘境」を、広く文科系の学生に知ってもらうのに、このゼミは意外にも役立つことになった。「先端研で政治学なんて変だよ」と学生たちはささやきながら、研究室の様々な仕事をアルバイトとして助けてくれている。

今、一九六〇―七〇年代に研究関心があるので、沢木耕太郎『危機の宰相』や庄司薫『赤頭巾ちゃん気をつけて』四部作をとりあげた。みんなが興味をもって読み破ったのには、正直いって驚いた。新装復刊の『狼なんかこわくない』の解説には、わがゼミのエピソードについて触れた。

これが“ゲリラ的”でまさに我流の学生教育体験である。彼等は四年間で確実に化ける。その意味で駒場での教育の意味は重い。駒場への全力投球を三十数年前、同じく政治学の佐藤誠三郎ゼミで教わった者としての実感である。そうそう、彼等の中から、『先端研二十年史』編集の力強いアシスタントが登場したことも、まことにうれしい一コマであった。

御厨 貴（先端科学技術研究センター）

（淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務部広報課を通じて行ってください。

No. 1349 2006年12月13日
東京大学広報委員会

〒113-8654
 東京都文京区本郷7丁目3番1号
 東京大学総務部広報課
 TEL：03-3811-3393
 e-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp
<http://www.u-tokyo.ac.jp>